川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年二月二十五日 印刷
昭和五十一年三月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五八六号

日川協加盟

No. 586

日米交歓川柳大会

三　月　号

中島生々庵
中島小石　共著

おしどり作家
待望の句画集

本年三月中旬発行

生々楽天

中島生々庵
中島小石　句画展

金婚を記念して

三月十六日（火）より
午前十時より午後七時まで
三月二十一日（日）まで
最終日午後五時まで

会場　画廊カワチ
（心斎橋筋十合北隣）

ご希望の方には頒価　三千円
（送料二百円）

川柳塔社

『生々楽天』発刊記念パーティ

昭和51年4月11日（日）3時～6時

会　場　（心斎橋）　大　成　閣

会　費　3,000円　（生々楽天・進呈）

テーブルの準備がありますのでお申込みは
3月末日限りとします

ふるってどなたも
ご参加ください。

刊行委員　（順不同）

若本多久志
西尾　栞
川村好郎
菊沢小松園
正本水客
橘高薫風

きびしさにほほえむ北山の杉丸太

裸木をくすぐるつめたい春の風

あしたへの春のいのちが藁かむる

宝舟枕に敷いて寝つかれず

宿命の糸織りためて喜寿と言う

中島生々庵

前号訂正

おちょぼ口こんな仕業も串団子

北海氏の提唱

このたびハワイで在住川柳人と川柳塔社との交歓川柳大会が持たれ大変盛会裡に有意義な稔りを結んだことは、何としてもご同慶にたえない。わが社からの40名も1月25日全員無事元気で帰って来た。賑やかな土産話は、聞く方も楽しく、語る方も心うきうき。5年前私達夫妻が北アメリカからの帰途うけた歓待を思い浮かべて懐かしさ一入。現地でお世話下さった方々のご心労もさぞかしだったろうと私からも厚く御礼申し上げる。お世話人の中でも前山北海氏と言えば、20年前、日本川柳協会結成の提唱と題する論文を「ふあうすと」に寄せて居られるが、実は本誌新年号に日川協に関連する所感を載せたのも、この際この北海氏の提唱を想起してのことであった。現在日本川柳協会発足して満1か年余、順調に成育して居て北海氏のご期待に添う日も決して遠くではないと考えて居る。ハワイ在住川柳人の皆様、ますますお元気に川柳のためにご精進下さる様祈りまして御礼の言葉とする。

川柳塔三月号

座右の句

子沢山　僕の枕は何処へいた　（路郎）

私の句

西風へ西を歩いてくれた父　岡村久志良

川柳塔　三月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

北海氏の提唱……中島生々庵…（1）
アンバランス……川村好郎…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（九）……（20）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（32）
麻生路郎物語……（15）……東野大八…（22）
秀句鑑賞……（同人吟）……若本多久志…（41）
……（水煙抄）……山本素郎…（56）
近作……諸家…（31）
百人一首と川柳…（21）……富士野鞍馬…（44）
愛染帖……橘高薫風選…（42）

アンバランス

川村好郎

今年の冬ほど不況はさることながら、風邪の猛威に悩まされたことはない。全人口十三人に一人は風邪に犯されたそうな。医学はめざましい発展を遂げ、難病も手術して全治し心臓の移植も出来るようになった。それも結構なことであるが、手近かな風邪の方はまだ風邪そのものを治すことが出来ず、温くして静臥するのが何よりだそうな。月世界へ飛んでゆく夢がかなえられている一方、未だ風邪で苦しんでいる。科学的知識もずいぶんアンバランスだ。

慶大教授池田弥三郎氏がその著書にこんなことを書いている。

ガガーリンが初めてロケットでとび出して地球は青かったという宇宙旅行を敢行した時に、ある人がガガーリンの子との会話に、

「お父さんは」

書評・垂井葵水遺句集……戸田古方…(46)
アローハ・ハワイ（日米交歓川柳大会）……(25)
橘高薫風・三井酔夢・野村太茂津・大路美幸
玉置重人・宮西弥生・若本多久志
選者交代の弁……菊沢小松園…(40)
夢を見る男……香川酔々…(44)
初歩教室……本田恵二朗…(50)
大萬川柳「倖せ」……川村好郎選…(52)
柳界展望……(54)
本社二月句会……（庸佑・整理）…(57)
各地柳壇（佳句地10選）……岸南柳選…(60)
「白酒」……竹中綾女選…(48)
一路集「耳」……仲どんたく選…(48)
「電気」……福田丁路選…(49)
編集後記……（一三夫・葉子）…(65)

座右の句

人生の傾斜へころげまいとする　（一三夫）

私の句

生かされていのちの重み夫がいる　堀江芳子

「ロケットに乗って宇宙をとんでいる」
「お母さんは」
「トマトを買いに二時間前から行列している」

この話を池田氏が人から聞かされたのは、二百キロでつっ走っている新幹線の中だったがその時池田氏は数十年来の足の水虫に悩まされている最中だった。

川柳はその表現言葉使いに長足の進歩をした。言魂の幸う国を遺憾なく句の上に表わしている。しかし句の内容はどうだろう。詠み古された人間関係身辺句がいやに眼につく。平易な言葉より文学的なものを、気のきいた言いまわしをとその方に力を入れすぎて、句材の方が軽視され、粉飾気取りに依って如何にも新化したように見せている。私のように何もかも旧態依然の句を発表しているのも困ったものですが、句想と表現のアンバランスも考えねばならない。

秀いでた着想素材、そして秀いでた表現、そんなことを常に頭に置きながら作句したいものである。

川柳塔

西尾栞選

桜井市　岩本雀踊子

夫婦して積木のゆれをかばい合う
炭火のぬくもりに捨てた村がある
鈍行に秋の短かい山の駅
茶話へ妻は先に死にたがり
旅の膳妻になじめぬ味である

倉敷市　水粉千翁

信念を通す重さで浮き沈み
沈んでも浮いても金魚見栄にされ
あのひとが語る瞼を開くまい
わが道を斬る北風に向き直り
くれないの愛のあかしの鼓動聞く

大阪市　不二田一三夫

人間のまわりに人間多すぎる
さびしい新聞広告だなぁー妻が喪主
アダムとイブの果実の味だけ受け継がれ
自慰という文字までポルノ語にされる
人妻の恋　万葉なら許される

大阪市　神谷凡九郎

俺と自分　私　みなバラバラで生きている
フィクションしてた自分へ眼を閉じる
結局は自分について見せた嘘
他人の見る自分が何故か知りとうて
そんな事他人に賢かしく云うた日よ

竹原市　山内静水

改らたまる新春へ妻のピンカール
炬燵布団替えて満ちたる三ヵ日
勿体ないこっちゃ妻とする昼寝
ご指名を頂き水を得た如く
棒にでも突きあたりたい日のあせり

竹原市　三宅不朽

ふる雪の版画のごとき城下町
雪あかくあかく溶けゆく雪の塔
美しい母だと思う雪に消え
いうなれば寅さん風の恋でした
花束を買うとき男負けている

勾玉の緑古代の霧を生む
止り木でまだ世に出ない竜である
旅人は消え一すじの水脈残る
約束の場所は間違えない仲間
コンパクト開く惰性の指となり

八尾市　香川酔々

屠蘇に坐す一年の計ないままに
角いつかとれて思想が岐路にたつ
過去すてて家計助ける職に就く
新しい役に弾んで辞書も買い
病妻の起つ日を信じ日記書く

鳥取市　河村日満

不機嫌な父へ味方の娘がいない
妻はまだ若しと写る湯のガラス
高級の文字が余分な分譲地
付睫毛まつげの使命など知らぬ
若草が伸びねば交尾せぬ野山羊

新宮市　大矢十郎

従いて来て度胸に呆れる市場籠
見ぬ振りをして行く車掌に腹が立ち
夜食までさせて漫画の夜が続き
もの腰に家の躾けが眼にうつる
また今年呼吸突く暇もない入試

大阪市　吉田圭井堂

放屁一発政治家へ呈上す
琅玕をくもらせている世の歪み
いうなれば人間もまた檻の中
茅屋でよし金色の陽も入り
ふるさとは吹雪の中もあたたかし

青森市　工藤甲吉

プラットまで追って思案まだ消えず
酔ったふり見せて妬心かくしてる
欠点をみんなかくしてある自画像
口下手のおしゃべり止まらない二次会
年輪をかくすブーツで温い冬

八尾市　宮西弥生

売場から見ると疲れた男たち
出世したのらくろなんて堕落だよ
完璧な駒組み自ら動けない
春の愁いを引きずるようにパンタロン
時間給にしたらお布施はこんなもの

松原市　谷垣史好

「坂」
お賽銭はことずけ坂の下で待ち
血圧を気にして登る女坂
「龍」
一筆の竜　画とも見え字とも見え
春巣氏を悼む
聴診器またよみ返すひと七日

西宮市　若林草右

君逝きてまた光ります雲の峰

八尾市　高杉鬼遊

お悔みへ軽い涙を置きにくる
警察で見せる涙を疑がわれ
機の音ふぶきの底で生きている
福笹を莫迦な一人になって買う
寄席を出てもう笑わない顔になり

米子市　八木千代

枯枝の意地ひっそりと芽を育て
瑞運を負うて来たよな嫁が来る
ブレーキをかける記憶のひだ揺れて
お隣りの幸へ素直な墨をする
感情で叱ったのに孫膝へ寄り

倉敷市　野田素身郎

仕事始め晴着に遠く管理職
貰い物のワインで済ます三ヵ日
一月一日息子やっぱり九時起床
晴着の娘腹を空かせて帰ってき
日曜日どちらも電話待っていた

岡山県　嘉数千代香

朝の鏡に今日のわたしをたしかめる
手びょうぶで囲み明治の灯をまもり
余生なお柿の木を接ぎ栗を植え
勝つことは負けることなりおんな坂
昂ぶりを消す洗濯を白く干す

今日の空に昨日の雲はとどまらぬ
美しいこやしになって母は耐え
文明が進むと海から涸れてくる
五十年やすらぎの日の幾日ぞ
貧乏を覗かれ銀行から帰る

八尾市　大路美幸

比呂路さん逝く一句

ふれ合いのむなしさひそと逝きし療友
待ち呆け食ったと言えぬ日の疲れ
浮雲よその気ままさを呉れ給え
友情の他人となった距離で逢い
ノルマ追う居職の窓を雪が打つ

大阪市　江城修史

夫婦仲よいのを子供に褒められる
布団敷く楽しさ明日はお休みだ
爪の色変えて女の今日の夢
衣装代気にしてドラマ見る女
内職をリズムにのせる湯がたぎる

京都市　都倉求芽

抜け道がない筈がない知らぬだけ
公平とばかり云えない第三者
債権者会議で小口は怒鳴るだけ
腕利きの弁護士付いてる倒産社
浮気せぬ誓いに頭丸めたと

大阪市　大坂形水

富田林市　板尾岳人

金剛の水を両手で飲むうまさ
春が来て金剛山はあくびする
金剛の峰に入れば春の詩
山頂に立てば金剛山にある闘志
水の味知っているから峰歩く

名古屋市　吉田水車

新幹線蒲柳のたちと申そうか
元日やせめて手拭いおろしけり
少うしはうそもまじえる二見浦
続々と達者を運ぶ年賀状
いつ咲いていつ散ったのか梅の花

高槻市　若柳潮花

買い溜めを吸えば禁煙すると言う
音痴でも唄の心は知っている
暮の風邪七草粥まで居すわられ
おけら火へ舞妓絵になる袖をふり
舞い初めへ仲居が運ぶ金屏風

尼崎市　黒川紫香

浪の色ここが日本の行き止まり
どっさりとひとりぼっちへ年賀状
靴ベラをそっと差出す手の白く
春近しこんなところに土筆の芽
木津の海だんだん冬の怒り見せ

倉吉市　奥谷弘朗

支えでも荷物でもある孫を抱き
悟り切るまでと深入りほっとかれ
無茶苦茶にしゃべりたくなる嬉しい日
これからが人生余生を口にせず
無理をしたらしい晴着がよく似合い

兵庫県　遠山可住

元旦の朝へやる気を繰り返す
釈明の余地なき尻を向けて寝る
冬の風に畳の際を見つけられ
年末に死んだ方から年賀状
訃報しきり下宿の風邪へ電話する

泉大津市　村上春巳

父さんに保険があるかと子に聞かれ
老夫婦マリモの故郷を考える
蒼空に魔女のホーキが画いた雲
公害の海しか知らず飛ぶカモメ

大阪市　金井文秋

日曜大工素人だませる程に出来
蛸焼を買う付合いの足を止め
妻高血圧に倒る
目が廻るくらむうめきと溜息と
中風でなかったこぶし閉じ開き

松江市　小林孤呂二

松の内右派も左派もなかりけり
実篤の水仙の詩座右におき

寒椿一輪管理職のごとくにて
選びぬかれた味で売れている老舗　藤井寺市　西　いわを

落ちる日はいさぎよしかな寒椿
しがみつく葉裏に花芽もつ桜
古本の匂いなつかし句集あり
ピンク色乳房は上気したそうな　神戸市　小浜牧人

正直に生きゆく顔は一つしか持たず
一本の傘で金婚夫婦なり
火のなかで死んで見せるに瞞される
風花しきり未練の残る別れする　島根県　藤井明朗

スキー背い母のせつない注意聞く
のんびりに見えても釣竿へ眼の動き
メロドラマ団地静かな昼下り
値上げブームの雲を呼ぶ昇り竜　竹原市　小島蘭幸

おトイレで自分の噂聞くも春
ライバルと抜きつ抜かれつ仲が良い
その一言がうれしくて新聞少年駈ける
慈悲の瞳のまま盗まれた仏様　東広島市　高橋鬼焼

隙みせて父の寝顔の疲れきる
職のある父地下足袋の詩を書く
あきらめる男に無口な海である
罪一つ消してはくれぬ雪の私語　八尾市　高橋夕花

甘えるでないと亡母の瞳がかなし
シクラメンわたしにそんな色がない
お茶点てて一人の部屋を独りにす
風邪の神わたし一人をおいてゆく　竹原市　森井菁居

セールスになり切る朝の髭をそる
街並みのここらに僕の青春譜
平凡の良さほのぼのと日記閉ず
宮島の旅
旅ごころ紅一点がいて愉し　鳥取市　両川洋々

歯に衣着せぬ忠告突き刺さり
真心へ心の扉すこし開け
農政のコロコロコロとまた変わり
気まずさのどちらも冷えた茶をすすり　富田林市　和田維久子

現実が夢　夢現実となる旅路
嘘一つひとつの夢を買う若さ
いつわりのあろう筈なし神の鈴
髪セット揺るる想いの鏡閉ず　東大阪市　竹中肖二

日本の心が匂う福寿草

元日をボソボソボソと老夫婦
正月の雑煮へ入れ歯腕を組む
良いことのある一日が短かすぎ

東大阪市　竹中綾女

日の丸がチラホラ淋しいお正月
孫へ出す年玉よりも多くくれ
うどん屋でバス待つ時間ぬくもって
正月の星座はっきりみとめられ

豊中市　戸田古方

私ひとり偶然やと思い込み
徹しているさかいに強い男いて
うまいこと枯木の枝がならんでる
また神だのみかと神様のたまえり

西宮市　島居百酒

有難くもあり迷惑もある歳暮
逝く歳へ流す忘却重たすぎ
特級を飲む人買いだめなどしない
めでたいとしとこう瞼に残る夢

藤井寺市　児島与呂志

師走の雨葬列を追いかける
香典帳上中下と区分され

悼春巣先生

師の影がゆれること無く雲なびく
酒飲みのたくらみ妻に見すかされ

和歌山市　野村太茂津

倖せは叱ってくれる友がいる
生き甲斐の次元が違う子も頑固
うやむやにせぬ企みの小さい枠
見極める視野を言いきるひとり旅

島根県　堀江正朗

手さぐりの手もかじかんで冬厳し
笑わねば仲間はずれになるテレビ
留守番の独りになって音多く
大切にされて目と目に見つめられ

島根県　堀江芳子

靴音は雪の固さで通り過ぎ
ピーポーは誰　炬燵から祈る無事
良心に響くものあり咳払い
継ぎ張りのように背中のサロンパス

米子市　林瑞枝

安逸に遠く働く手を誇り
生涯を珠玉のひとこと胸に秘め
蔭口の調子に乗った日の憂うつ
若夫婦帰り活気を得た邸

島根県　小砂白汀

一つずつおとこを捨てるゴマを擂る
グウの音も出ないとこまでのめりこみ
ハミングで雑用こなす娘ぞうれし
綻びつ飾りボタンが引っかかり

鳥取県　清水一保

暖房の代りに愛と和の温み
一役を逃れて一役また背負い
初詣までライバルが居て励み
春の夢羽育むように雪積り

呉市　林野甦光

揚げ足を取る一言を云いそびれ
代筆の視覚涙を見てしまい
雪国の愚痴を屋根から掻きおろし
踊らないコケシ見つめている徒食

岡山県　浜野奇童

百八の余韻を踏んで初詣で
神様に逢えず帰った初詣で

老父喜寿と金婚を迎える（二句）

あばら屋へ溢れる孫と喜寿を汲み
金婚の父母います初春を汲み

大阪市　川口弘生

十二月某日　額　ストーンと落ちぬ
糸切れた凧に木枯し冷めたすぎ
飛んでみて空退屈なものと知り
親娘連れ清教徒のような旅

松原市　玉置重人

妻の留守意外な娘の茶碗蒸し
洛々とギャンブルのこと一家言
石ひとつ置きようがあり京の寺
建売りが完成しましたアドバルーン

松江市　柳楽鶴丸

昔の雪は　白かった
チリンチリン甘いあまーい秘密
暗いトンネルを抜けて　元旦
暖衣飽食　恐しい恐しい

富田林市　岩田美代

追うまじき夢のんのんと初鏡
水色のハンカチ噂を包んでる
疲れてる話せる人になりたくて
水吸うて吸うて枯木同士なり

宝塚市　傍島静馬

隙のない容姿にお喋り惜しまれる
寝込まれてつくづく妻の有難味
松過ぎておためごかしの人減し
マスコミのタクトに弟子の芸荒む

美祢市　安平次弘道

年金が上りまだまだ死ねぬ欲
国債へ戦時の悪夢よみがえり
世間体気にして夫婦愛は冷め
絶景をみやげもの屋が邪魔をする

大阪市　山川阿茶

戎さんへ福をあげたは確かなり
大晦日小唄弾くのも一人なら
あまえるな自分はひとり一人だよ
老醜の素顔手鏡はっと伏せ

錯覚がとまどうている手のやり場
見栄をはる女の爪が赤すぎる
ささやきは己に克てと冬の風
竜頭の蛇尾に終らぬ意地を賭け

大阪市　飛田好一

雪化粧真紅な椿はおちょぼ口
正月を臥竜で過す風邪の床
アパートも良きかな窓から初日射し
おさいせんカーブで投げた五十円

大阪市　宮尾あいき

深い雪出雲を神話に近づける
就職の決まらぬ顔でおめでとう
ローン終るわが家あちこちほころびて
うかつにもお年玉に風邪貰ろてくる

松江市　中川晃男

新春はよし街を歩けば琴の音
訪う人も無くシクラメンの赤暮れる
塔うれし今日は墨絵のシルエット
スト権ストそれから社運狂い出し

京都市　松川杜的

才能に恵まれ過ぎて狂い咲き
酒のみの血が騒ぎだす宵の雪
人妻に気をもたされて酔いつぶれ
へべれけのくせにタクシー値切り出し

神戸市　中村ゆきを

命はかなし暮正月も言うとれず
仏となればみな善人にしてしまい
いとしさが憎しみに変ることもあり
物真似の名人己れの声知らず

守口市　村田瓢太

自惚れと言われてみればかも知れず
口かるい男で胸をたたく癖
選挙戦拍手も派閥の音で鳴る
初孫の子守実家で奪い合い

和歌山市　吉野富子

願望を絵筆に乗せて昇り竜
昇り竜山馬画筆に夢を乗せ
雲助の正態見たり乗車拒否
小包料今年限りの餅送る

米子市　増田竹馬

例えばの話を妻が許さない
この知恵をはたちの頃に持ってたら
歯を直す金を余命で割ってみる
ベレー帽男くささが消えている

岡山県　白岩文衛

姉　妹　中の男の子へ僻む
下取りの限界新車が欲しい嘘
正論が正直すぎて通らない
結局は古巣に帰えれと言う左遷

下関市　国弘半休門

今治市　越智一水

正直にバカをつけられ米づくり
足下をすくわれまいとして転び
常識で生きてこの世は無事と知り
　金婚のテレビ見て
素晴らしい貧乏をしてうれしがり

愛媛県　渡辺暁童

椿かぞえる風　がおさまる
とむらいの日　すごい物音
新春に一句　すごいかぜひき
つきぬうらみも　年が消させる

大阪市　河井庸佑

言い分が有っても年上叱られる
一けたと言う春闘の幕開く
裏表知ってるだけに手が出せず
噂ではたで食う虫にされていた

大阪市　本多柳志

例外にする前例をたしかめる
行きずりの恋も詰めこむ旅鞄
銀行の師走冷い灯を点し
連休は悲しからずや子沢山

橿原市　岩井本蔭棒

Uターンもならず喪中へ賀状つく
初めての釣書惰眠を揺り起し
妻にまだ泣ける私の胸がある
くっしゃみが出そう剃刀引っ込める

西宮市　藤村〆女

父一人欠けてこんなに広い部屋
冗談だ冗談だよと火種置き
まだ夢を捨てず残り火かきたてる
母の目がときには女として炎える

柏原市　大峠可動

青春の独創に明日が刷ってある
甦る石の音なり春の川
野望朽ち果てて一本の葦になる
人間のうぬぼれ悪魔とも知らず

大田市　藤田軒太楼

初孫抱いた三ヵ日あっけなくも過ぎ
表情に出さぬ男で近寄れず
とそ機嫌父子の対話つつがなく
これでいいのかと老兵とそを酌む

倉敷市　稲田豊作

景気待ち今日火の車押しながら
エリートの歩幅に合わぬ僕の足
物好きが下火の恋を煽いでる
黒枠へお前お前と酔うている

東京都　山根白星

電報に母のあわてるにも程度
しゃっくりへ処方それぞれ無責任
屠蘇までを他人行儀のままでよし

近因はとくと承知の胃の痛み

倉敷市　能登原白水

新年の挨拶ぶりで鳩が寄り
元旦の朱盃三三九度のよう
一生の車あと押す妻がいる
過疎たのし雪と見まごうソバの花

島根県　錦織文子

渋柿の変身愛へ生かされて
も一人の私が魔女にもなりたがる
嘘をみな捨てたく女髪洗う
十指皆生きてる産声のガラス窓

大阪市　天正千梢

卑怯者の鶴の一声ではおさまらず
修身を教えてももどらぬかわきよう
努力の尊さ可能性を信じかね
目に見えぬ秩序に順応してしずか

高槻市　福田丁路

暮し向き中位なり昼寝する
こじんまり野性時代の角で生き
空を行く農協さんの初詣
宿命の対決握手して幕となり

大阪市　中川滋雀

晴天の霹靂娘に結婚を言い出され
ほろにがいめでたさ三人目も嫁ぎ
四海波静かに初春を風邪で寝て

枯並木風が囁く冬の詩

和歌山市　津田与史

初詣だけの信心とは言えず
光陰の矢よ時々は折れてくれ
檻の中に住んでる自分を見てしまう
喜びも悲しみも　もう通り過ぎ

鳥取県　鈴木村諷子

シャッターを降ろし家庭の人となる
一粒のカシの実に満つその抱負
鉄道は鉄道本位に地図をかく
ここいらは手相にはない廻りみち

東大阪市　落合思月

紫の布団に寝たきり包まれて
又お出なさいと引き止めてはくれず
愛情の小出し男はいらいらし
喜びを背にも見せて妻の旅

三重県　川上大輪

元旦の笑いをテレビから貰う
時計屋の時計いくつも嘘をつく
握手した手の冷たさは敵意だな
正直な男で汗をかいている

堺市　高橋千万子

いい話さっそくめくるカレンダー
通知表の成績小使いにひびき
コマーシャルから空腹をうったえる

鉛筆の音が生きてる試験場

平田市　久家代仕男

身の保全夢のあがきの中にさえ
職安へ行く日の雨は気が重し
一日がながあい個室の管理職
遠心分離手元になにも残らない

岡山県　出原敬一

不況への面当て厚いテキを食う
言わぬが花と友慰める酒追加
吹雪く夜は異国で果てし友想う
母の肩もむ瞳は刑事の瞳ではなし

倉敷市　小幡里風

薬にも毒にもならぬから忘れ
黄水仙活ける師匠に軽い熱
白い花つけて流れへ逆らわず
ただ風の吹く故郷を振り返えり

兵庫県　河原みのる

沖縄旅行（二）

魂魄が云わせるようにいくさ説く
珊瑚礁乙女の血潮吸うた洞
遙けくも今支那海に日は落つる
天孫にあらで筑紫に天降り

玉野市　小谷仙山

無礼講に成って上司が座をはずす
ジャンケンポンやっと妥協に槽ぎ付ける
七光崩れぬ積木積んで居る
程々の妬心シクラメン買って来る

和歌山市　若宮武雄

とっつきがわるく善意を蓄めている
さりげなく雪をかわしている柳
負けてから乱れたペースまた負ける
出土した壷忘却の貌でいる

愛媛県　村上旭童

旨かったのは義歯なかった頃の味
年代の違い争うのをやめる
本物の味は故里だけに有り
生きていて良かったという事にする

大阪市　西出一栄

晴着より海外旅行の現代っ娘
小走りで冬至のカボチャ買いに行き
余生にも余生の坂のあるを知り

氷見市　関美子

虫くいの豆選ることも厨ごと
八起きなどとても一倒許さぬ世
不況風よそに「ベルばら」燃え続け

神戸市　仲どんたく

漫画本読み読みデート待たされる
不況にききますと神さん宣伝し
家族パーティー罪ほろぼしの顔が連れ

今治市　原田一風

明けまして老人会へ誘われる
正月の帰省で見合い片付ける
縋り付くように躾の糸を取り

枚方市　宮川珠笑

主を待つ客間の竜に睨らまれる
屠蘇に酔い小猫と睨みあう日向
初明り切って救急車が走る

和泉市　西岡洛酔

平凡な竜です登りなぞ知らず
四度目の竜まだ凡人と云う暮し
変遷の四季へ嵯峨野は彩を変え

羽曳野市　塩満敏

民主日本パスポートに菊の紋
気にくわぬ客もあろうに自動ドア
来るか来ないか待つ人の百面相

岡山県　竹内翁童

来てみれば何んでもなかったお正月
ローン済んでポツリポツリと雨がもり
水茎のあとうるわしき無心状

大阪市　西川誓二

日本クシャミすれば韓国風邪ひかん
老いてまだ色即是空がちんぷんかん
不景気な風で上るな竜の凧

松山市　谷のぶお

いつまでも平和を願う凧の天
ワンタッチ後の始末はしてくれず

鳥取市　小林由多香

坂のあるコース主将が引きうける
マニキュアの指でみかん撰って買い
畳替えついでにタンスの位置も変え

岡山県　直原七面山

きつく抱けば女は火
猫抱く女の乱れ髪
欺す気はない女の目

姫路市　梅谿庵不酔

不景気がどうやらうちへも来た様子
釘にまで馬鹿にされたか曲ったり
年玉をやるまで孫がひざの上

松江市　恒松叮紅

成人式和服の値段だけを聞き
吹雪く夜の鍋は平和な湯気となり
正月早々催促を言いそびれ

宇部市　平田実男

妻や子のための保険へ妻の愚痴
中ピ連恐がる男でもてている
悲しみの深さ泣くことさえ忘れ

守口市　野呂右近

幸福行の切符持たぬが旅楽し
老の坂登るに妥協の杖を立て

なまじっか知って血圧ノイローゼ　笠岡市　松本忠三

夫婦間殊更変える意思が無い
三カ日だけの帰宅を医者が許可
ご馳走が喉につかえた鞄もち　竹原市　時広一路

鏡ふと自分の役が怖くなり
捨てるにはしのびず千羽鶴褪せる
素晴らしい美人韓国から人形　呉市　槇田英詩

民謡は貧しき者の哀歌かも
御破算で願い不況へ吐息する
集団就職錦飾る子消えてく子　奈良市　宮口笛生

正月の一色となる街に出る
初詣で有難過ぎるいい日和り
美しき水の流れも三カ日　倉敷市　藤井春日

金があるからお父さんお父さん
子を諭す老妻僕を例えにす
期待した金の玉子に職が無い　生駒市　草深酔升

値の安さ煙草一個と比較され
迷信と笑いながらも気にかかり
孫の手を使うて老の孤独感

何時もどこかで風が吹く世界地図　大東市　土岐トク子

政治家はケースバイケースで七変化
一電車おくらせ母を待つ歩巾　松江市　岡崎祥月

妻にだけ言える心の紐をとく
二十四年平々凡々職を去る
神様の借りもの五体ままならず　大阪市　黒田真砂

自意識が過ぎて女の目が狂う
失った若い日の夢子にたくし
娘の晴着花嫁姿とだぶらせる　松江市　舟木与根一

ハネムーンの帰りと見たり肩で寝る
寡婦のゆび子が手離れた艶を増し
国会延長無関心になっていき　東大阪市　斎藤三十四

クリーン三木テーマ通りには行かず
宝くじ末尾の一字だけ当り
年玉を数える孫の指たらず　唐津市　新岡回天子

家のない処獅子舞チト疲れ
七草といえど七草ない都会
名優と言う獅子舞の舞台なり　今治市　小笠原有里

賀状くれ嫁の話をもってくる
腹の底わった話でけりがつき
貫禄は指のダイヤが目に立たず

大阪市　藤田頂留子

神酒供え神を上戸と決めている
手を借して母はうれしく娘を着せる
風邪にさえ見むきもされぬ一人者

神戸市　佐々木静泉

現実はきびしいなどと夢のない
良心に味方　自分は瞞せない
同じこと考えてたのかと妻と笑う

鳥取県　林露杖

ボーナスの額にはふれずおがむ妻
どもるのがやたらかるたをよみたがり
正月は全員集合酒美味し

和歌山市　内芝としよ

急ブレーキ　チャンスと肩を抱き寄せる
昨日の事想い出せないじれったさ
こげついた集金妻が腕を見せ

鳥取市　大塚豊生

大時計寒波の中の白い息
ぴったりと寄り添う嫁に目を細め
うれしさと別花嫁は下を向き

仙台市　川村映輝

気の強い妻が居るので気楽です
間の抜けた顔へ髭をつけて見る
成人式酒の味も知りつくし

高槻市　山田季贇

ゼンマイを巻き直して見る病み上り
当分は早寝早起き病み上り
香水が匂う面会時間の廊下

小松市　馬場魚山

お互いの為にと別れの理由づけ
舞い戻る女へ威猛高が待ち
愛される顔が苦心の人形師

大阪市　津守柳信

あきらめが希望に変る除夜の鐘
善意だけ信じて生きるに骨が折れ
夜更かしに馴らされていた三カ日

和歌山市　沢山福水

南蛮の壷へ太古の竜が棲み
美しく肥えて不倫の罪つくる
三浪がやっと家業を継ぐと決め

大阪市　室谷徹舟

本当に聞きたい言葉陛下逃げ
委しきる医師の姿は神に見え
愛嬌の良い看護婦の痛い針

出雲市　原独仙

しょむないテレビ仕様もないから見
流し場の米粒耐えた日の想起

冬陽背に想い出を抱き猫を抱き

大阪市　神田秀峰

冷暖房完備でお先に風邪を召し
嫁かず後家やはり一筋縄が出る
列島にまだ過疎があり旅楽し

尼崎市　高津徹也

日曜大工妻のさしずがおもしろい
肩書きのない健康をもっている
静をつつむ初春の床の間いつくしむ

守口市　羽原静歩

長女結婚（二句）

結ばれて二人三脚さわやかに
梅林へとぼとぼとぼと我執の瞳
遍路笠坂いっぱいに影法師

八尾市　古川鶴声

初日の出ねていて拝めるとこに住み
吸血の顔が寄ってる祝賀宴
汚職とへつらいそれが昭和の政治家よ

兵庫県　大江秋月

焚火だけ残してローカル線発車
話し上手へ合槌をうつだけの芸
田舎にも無い水車が大都会に在る

貝塚市　行天千代

初詣で生駒山にも雪はなし
嫁に帯結んでやって平和なり

若人の仕事の顔と恋の顔

京都市　山本祇風

東京〇時発普通車の客となる
絵に添えて浄土ケ浜の詩を妻へ
三陸の名所の冬へ里帰り

大阪市　神夏磯道子

傷つけて自分の傷が分らない
胡瓜切る姑と嫁の音があり
宝石で心のがしさ救われず

島根県　西村早苗

口先きの怒りほどない目の微笑
新聞が神棚にあって受賞する
打ち消せば消したで誤解深くなり

西尾栞

レイかけて夢のハワイは文字通り
レイかけて夢のハワイよ詩の島よ
波のりの背に夕陽の素晴しく
観光団曾遊の一人よく喋り
観光バスガイドのままに右左

菊沢小松園

死の覚悟出来て命を大事がり
道しるべ人を迷わすのも混り
言訳の中に組まれてゆく喜劇
闇あたり天寿を何と口にせず
同行二人大師をすでに見うしない

憤懣に耐えて世相に背を向ける
遠廻しにきやはったなと身構える
好不況淡々として老いの春
政治には触れずのんのん寝正月
先生と呼び先生と思うてず

第三の峠に立って古稀という
若い血が少しはあるぞ初明り
激動と言っても　もたもたした不況
バーゲンのチラシが踊る春の陣
損をしたみたい腕組んで歩かねば

春の旅老人会は想を練り
耐えているこころ彼岸へ指を折り
お水取り近しもうひと息の春
草も木も人も春待つこころなり
木々の芽がいたわられつつ春を待つ

あすのある男せっせと靴磨く
自動巻が止ったような妻の留守
旅慣れぬ妻気疲れをして戻り
願い下げする気の話題変えてみる
例の如くちゃんと居残る二次会組

若本多久志

尼　緑之助

浜田久米雄

本田恵二朗

日がのぼる竜のひそんでいる雲か
池中の竜　満月を抱いている
後手々々にまわって笑顔たやさない
たしなめられたとは若さ思うてず
カニ食べに雪の装束ととのえる

枝のない椰子を夕日がすべり落つ
就中ひょろひょろ椰子の親しさよ
また会おうなと青い椰子の実に別れ
店を出てチップを置きにひき返す
　高本きみ夫妻と再会
大阪弁ハワイ弁よしこころの灯

禍は時を撰ばず冬の避雷針
今日も健やか一片の雲もなし
救急車また走ったよオイ寝よう
追い越され越されて老いの歩巾知る
順不同やはり女は下座撰る

正本水客

橘高薫風

川村好郎

生々庵・小石共著「生々楽天」行事メモ

☆生々楽天刊行記念句会は金属会館で三月八日開催
☆心斎橋「画廊カワチ」で三月十六日から句画展
☆生々楽天発刊記念パーティは大成閣で四月十一日開催

誹風柳多留廿五篇研究

—（九丁）—

清　博美・西原　亮・八木敬一
鈴木　黄・紀内恒久・室山三柳
青木迷朗・入江　勇・岡田　甫

入江　勇

160　**辻番てしめを引はるいゝ天気**

清—辻番での正月の準備を詠んだ句か。正月のために注連を張っている辻番、天気も晴れて小春日和、世間があわただしい中に、ここだけはのんびりとしている。

八木—虫干しかと考えていたが、礎稿のようなことか。

青木—祭礼の様にも思えるが……。

室山—「しめ」がいまひとつはっきりせず。

入江—「しめ」は姫糊の略。「のりをひく」の「ひく」は「延べて塗付ける。刷毛・筆などで液体を塗る。日葡辞書ノリヲヒク」と『初版広辞苑』に見える。「引っ張る」はヒキハルの音便。

辻番が天気がいいものだから、破れ障子とか襖を糊ではっているところ。

内福な男かのりをひいて居る　安九・智4

これは町内の番太郎で越前者が多かった。田舎に田地田畑を所有しながら江戸に出て（不在地主）きて、隠居仕事に番太に雇われている。給金はわずかだから内職に子供相手の駄菓子を売ったり姫糊を売った。辻番の方も内職に鼻緒、草履などわらでつくって売ったりした。

岡田—辻番のオヤジは富有な隠居でなく、貧乏人が多く、辻番をして金をため込んで、晩年に帰国する者が多かった。

161　**油うり跡て水はなほどまける**

清—江戸の町に、点灯用の油を売り歩いた油売り、その商売の情景をうがった句。

油売負に一筋糸をつぎ　四八・5

油売しの字に負を垂らす也　三三・26

などのように、ねばり気のある商品故に、負ける恰好が浮きぼりにされる。

八木—賛。

気を長くあぶらのまけを待て居ル　天五・宝2

油やハまけによたれをたらしこみ　三六・43

油売まけに大戸を下げて行き　四・25

岡田—同。

162　**見物左衛門かごかきに邪魔かられ**

清—見物左衛門とは、見物する人の擬人名。この見物人、どこを見物するかというと、無一文で吉原見物。簡単にいうと素見客である。吉原まででてくて歩いて行くのだから、途中駕籠かきの邪魔になる。

八木—賛。大門の中には駕は入れない。そこで礎稿の「途中」が大切。土手あたりの情景か。

見物左衛門をあてに土手の茶屋　二一・16

西原—賛。威勢よく土手八丁を走るありさまが活写されている。

岡田—諸説の通り。

（十丁）

163　**五十茶をやっぺしほめる雨宿**

八木—「五十茶」は、一斤五十文の安いお茶のこと。「やっぺし」は、やたらに、しきり

にの意。
雨宿りをして、お茶をご馳走になった。一袋五十文位の安いお茶だが、やたらに「結構なお茶で」などとお世辞をいっている。
青木—贅。

雨やとり額の文字を能おほへ　初・14
蟬がなき出すとお世話に成りました　一五・38

室山—同。雨やどりをさせてもらっている悲しさ。世辞もいわねばならぬ。
岡田—同。

164　**にんじんのはゐるハ安い鱠也**

八木—はっきりしないが、本当のナマスは魚肉で作るのだが、魚のかわりに人参を入れて作ったナマスは安物だ、というようなことか乞御教示。
青木—魚肉のなますに対して、大根、人参のなますを「安いなます」と言っただけの事であろう。
入江—魚肉を使わぬ精進料理のなますであろう。
岡田—赤いのがあるから、魚かと思ったら人参。

165　**つふれねゑみかん持てる五軒の子**

八木—「五軒」が問題である。
『川柳雑俳用語考』では、棟上げの残りの餅やみかんを、大工の客が、根津の茶屋、娼家の子供にやるのであろう、としている。
また、「解釈と鑑賞、揺籠から墓場まで」で、岡田甫先生が、十一月八日はフイゴ祭。鍛冶屋はこの日、屋根から密柑を投げて子供達に拾わせた。本句を引用し、五軒は向こう三軒両隣りの子で、彼等には投げずにやるのである、と。
その他の資料も参照して、岡田先生の説を頂き、フイゴ祭りの句としたい。五軒は向う三軒両隣りの意であり、それらの子供には、別枠で新しいみかんをやる。
青木—同。現代でも火床場のある工場では、火床の真上に金山様を祭る神棚をしつらえ、十一月八日にはフイゴ祭を行い、みかんを山に積んで神前に供える。
岡田—小生の説が正しいと思ってます。

166　**門ト口にらんぐひの有る宿ク紺屋**

八木—「らんぐい」は　秩序なく、やたらに打ち込んだ杭。敵の侵入を防ぐに使う場合もある。
宿クの紺屋は、宿場の紺屋だから　広い張り場を持っていたであろう。いたずらなどで入るのを防ぐため、入口に乱杭があったのであろうか。
青木—宿場の紺屋の伸子張り用の杭を、砦の乱杭に見立てただけの事であろう。

紺屋では千の矢先のかけはづし　宝一三・天2

岡田—青木説の通り。

167　**酒店でほり物をするらんがしさ**

八木—酒店でほり物をしている。酔払っているのであろうか。まことに騒がしいことである。と解してみたが　どうもしっくりしない。乞御教示。
紀内—「酒店」と「ほりもの」の結びつきがはっきりしない。
入江—「ほり物」が不明。
清—酒に酔った勢でいれずみをするというのは少々突飛すぎるか。とすれば、「ほりものをする」は、酒店の何等かの行為を比喩しているのだろうか。
岡田—大難解句。まず「酒店」を治定すべきである。正解はそこから出発する。駄労解を一つ　この「酒店」を酒問屋とすれば、新酒が出来ると〈角田川〉なんていう銘酒の名を今ならレッテルを貼れば事足りるが、酒樽に彫り　墨を入れる。こんな場合でもあろうか。但しこれはくれぐれも駄労解、酒店の語が治定すれば、おのずから他に適解が出て来よう。この句は　宿題とします。

第九回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会

日　時　五月二十三日（日曜）十二時
会　場　兵庫県民会館　特別会議室十一階
兼　題　「小　説」　田中　好啓選
　　「流　行」　森中恵美子選
　　「先　頭」　大森風来子選
　　「針　」　福永　清道選
　　「予　言」　中島生々庵選
　　「峠　」　三条東洋樹選
　　。各題二句。欠席投句受付けず
主催　時の川柳社

橋本緑雨

麻生路郎物語（15）

―同人の集散と橋本緑雨―

東野大八

「みをつくし」の啞人一派の脱退。そこから居残った橋本二柳子（後の緑雨）に「灰」を廃刊して新同人となった塚崎松郎、井上刀三、林田馬行らで川柳雑誌も再スタートを開始した大正も昭和と改元された頃の路郎は、作句に川柳行脚に多忙な毎日を送っていた。

―**俺に似よ俺に似るなと子を思ひ**　路郎

の路郎の代表句は、大正十五年七月十一日に開かれた第五回柳談会で生れた。この柳談会は毎月の第一日曜を定例会と定めて、この年からスタートしていた。井上剣花坊が大連の帰途、路郎宅に一泊したり、新興川柳の論客として地力をあらわした田中五呂八の論旨に一矢を報いたり、和歌山の柳陰社を訪れたと思えば、上京して雀郎、○丸、柳路、千代二、鯛坊（のちの村田周魚）と柳談に花を咲かせたりしていたが、あけて昭和二年三月一日長男ロンドン（九歳）を失った直後、路郎は愛児の死のショックも加わり罹病して阪大病院に入院した。診断は悪性の腸チブス。

「診察が終って路郎は病室へ運ばれましたが、名誉教授長崎仙太郎博士（柳号柳秀）のおことばによれば、こんどの路郎の病状は大分悪質とのことを私は暗にきかされました。病室へ見舞にくる人はさまざまでした。心配そうな顔付で来る人、長居をせずに早々に帰る人、病室でビールを飲んで帰る人、大声でばかばなしをして行く人、なかには路郎の病状をきいて帰る人もあったでしょう。医師の言葉では、回復はおぼつかないと思うて帰った人もいるでしょう。しかし幸か不幸か路郎は奇跡的に死線を越えて退院いたしました」（霞乃書帖）

「松郎・馬行・鵜足（旧号莢豆）・美乃作の連中、路郎の病後ある要求を持ち出し、訣別す」（山雨楼メモ）

「私は松郎さんにしろ、刀三さんにしろ、馬行さんにしろ個人的には何んのわだかまりも持っていません。刀三さんは奥さまの御病気の時、しんみりと私に御相談もあったし、刀三さんの句は私も好きでしたから好意は持っていても、いやな感じは毛頭持っていませんでした。他の方々に対しても同様でございました。それなれば、何故路郎との間に出来たヒビの修理をしないのか、とおっしゃるかもしれませんが、そういう場合、私個人としては許せない嘘を双方に言わねばなりません。私にはそうした芝居は一切うてないのでございます。たとえ強靱な接着剤でついでみたところで、壊れるものには壊れる因縁がすでにはらんでいるのですから、人間業ではどうしようもないのです。

―**雲雀啼いたとてまぎれましようかね赤椿**

の句を作っていられた頃の莢豆さん（路郎の友人で写真好き。のち鵜足と改号）は、よく私の家へ遊びにきていました。野口雨情さんが遅日荘を訪ねて来られた日も、莢豆さんは遊びに来ていました。そして中庭で私達の記念写真を撮って下さいました。（第10回カット写真参照）

その莢豆さんがいつ松郎さんのグループにおはいりになったか、その辺はハッキリしません。後に鵜足を改号なさってから盛んに十

二字詩を作っていられました。その短冊は、今も私の手許に残っています。

駒井美乃作さんは文壇人に多くの知己があり、たしか「土団子」に路郎は「白粉の花咲く家」というのをかいていたと思いますが、あれは美乃作さんの家なのです。美乃作さんは愛人と私たちの家でお泊りになったこともございます。鳴尾ではじめた柳談会を毎月開いていた頃、ある夏に体験のある怪談ばなしをしたことがございます。美乃作さんは自分の体験談をされましたが、実にうまいもので、まるで高座の人情話をきいているようで、身の毛のよだつ思いをしました」（霞乃書簡）

「川柳雑誌にとって橋本緑雨氏は国宝的存在であります。首と胴程の密接な関係のもとに、創刊以来堅忍不抜、全く献身的努力を続けてこられた。そもそもこの緑雨氏（当時二柳子）を見つけられたのが路郎氏であります。爾来両者は駿馬と騎手の間柄をもって相信じ、相敬しつつ、昔の武士道の「己れを知るもののために死す」の気魄が双方にみなぎっていた観があります。

路郎先生が、鳴尾に住んでいられた頃、社の用務を帯びた緑雨氏は、大阪築港の自宅から電車を三、四度も乗り換えて、月の半ば以上も通われたのであります。それが一月や二月ではなく幾年も続いたとき、僕は瞼の裏が熱くなりました。古い川柳雑誌をみる毎にそれが先生や緑雨氏の汗と血との賜である事に思わず頭が下るのであります。この緑雨氏の熱に痛く感動されまして、仕事も家事も経済も忘れ、一路川柳の為に路郎先生は斗い抜かれたのであります。

先生は他人の原稿に就いても、穴のあく程よく眼を通されますが、自分の原稿には一層厳格で、一字一句といえどもおろそかにせず句の選など慎重に慎重を加えていられます。雑誌編集の期日が迫ってもなお先生の選句がすまぬ時など、緑雨氏は大晦日の借金取りみたいな意気込みで催促にでかけます。

でも、先生の選句眼を信じている緑雨氏は二時間でも三時間でも傍でじっと待つ。こうしたことは気の短いものには一カ月間ともたぬ。先生は病気で寝ていられても床の中で、投句の選をされている。その枕元でじっと緑雨氏は坐りつづけている日もありました」（川柳研究・昭和九年六月号・福井山雨稿）

「橋本二柳子（後の緑雨）さんの本名はたしか与作と思います。緑雨さんは川柳以交吟社「みをつくし」のメンバーでありましたが皆が川雑を離れて行っても後へ残って、路郎を補佐した唯一人の人であったのです。

この方は事務的な人物で、公務の傍ら毎日のように遅日荘へ足を運んで、路郎の原稿のおくれそうな時はあっちの抽出や、こっちの抽出をあけ、材料を探し回り路郎の前へ置きました。路郎の虫の居所の悪い時は、激しい言葉も出たでしょうに、ムッとした顔もせずに、実に忍従そのものの姿をみて、私はねばり強い北国の人の根性をハッキリと認識いたしました。ひとつには、社を出ていった仲間の人達に代って責任を果たさねば、という面もあったかとも思います。それにしても川雑の運営に常に頭を働かせた人でありました。

こうした路郎と緑雨の仲をさくため、時には中傷する人もありましたが、路郎と緑雨はただきき流す程度で、二人の仲はなんの疑念もなくにすんだのです。緑雨さんの手紙は電文のようで、一切ムダな言葉は省略されていました。お互いの会話もその通りで、単刀直入、味も素気もないので、緑雨さんという人柄を知らぬ人には傲慢にもぶしつけにもみえたことでしょう。だから緑雨さんは初対面の人には口をききません。

緑雨さんは小器用な作家ではありませんが真面目に自然を見、社会状勢にも正直なメスを入れました。こうした彼の性格が句に反映して無技巧な技巧を構成することもあるのでした。

川柳雑誌社の事務所が杭全町の緑雨さんの自宅にあった頃のことです。発行日前になると編集部員は、彼の家へ寄ってきました。彼は馳けつけてきた柳人へ持前の口調で「君はこれや」と仕事を突きつけ、汗をふく間も、茶をすする間もありません。それでも誰も文句は言いませんでした。言葉を飾ることを知らない彼を知っていたからです。また事務的に動く彼を知っていたからです。この理解があればこそ、お互いに気まずい思いもせず、編集部は波風もたたずにやってこられたのでございます」（霞乃書簡）

緑雨は昭和四十五年四月十六日七十七歳で死去した。晩年は愛妻と愛嬢の死で川雑から

すっかり身をひいた形だが、路郎を追悼し川柳雑誌の廃刊を見さだめて他界していった彼の感慨は、さてどのような追想があったことであろうか。

長男ロンドンの死去、そして路郎も病気入院、加えて松郎、馬行、刀三らの有力同人との訣別など、そのような鳴尾から昭和二年六月岸の里に移った。そして川柳雑誌も、この年八月号から同人制を廃し社友制をとり、賛助員、客員制とした。「合名会社が株式会社になったような形だ」と路郎は編集後記で述べている。

こうして講演に、川柳行脚に、新聞雑誌の柳壇の選に活躍する傍ら、川雑では川柳漫画を毎号とりあげ、その一つの「累卵の遊び」を刊行し、月評を毎号試み、社内漫談会を催しそれをまた「川柳漫談」と題して刊行したりした。この昭和三、四年のころには雑誌刊行の印刷費を稔出すべく「広告売文社」（昭和四年・大阪文案社と改称）を興したりしている。そして昭和五年十一月には葭乃の父、河盛彦三郎の死去に遭うのである。

「不朽洞の大掃除が九月四日に行われた。この日から僕は階下の表六畳に移った。親のスネかじり時代、二階借時代、居候時代は勿論のこと、一家の小さな主となっても階上でなければ落着けなかった僕が、階下に自分の部屋を持つことは、僕の生活様式の上に非常な革命である」（川雑・S5・10月号・川雑編集後記）

「私が前号で階上生活から階下に移った事を報じたが、わずか一カ月足らずで再び階上生活へともどることにした。それは葭乃の父芦村翁が十月五日の夜、天下茶屋の某家で卒倒したため、階下の子供室が翁の病室にあてられたからで、僕の部屋が子供室になった関係からである」（同11月号）

路郎の句にある

―**二階を降りてどこへ行く身ぞ**―

は川柳雑誌第三巻四号に載ったものだが、彼の二階好きは

見上げれば二階に椅子の端が見え

の作品とともにこの頃の彼の心証や気分がよくにじみ出ている。

「昭和五年十一月十四日河盛芦村翁逝去す。行年六十五歳。俗名河盛彦三郎、堺の木綿問屋河内屋の外孫。ほとんど生涯を教育界のために尽す」（山雨楼メモ）

「芦村翁の長逝について水府いわく〝関西川柳社創設当時奮った人、文字の美くしい謹厳な士であった〟―半文銭からも〝僕も寂しい〟との悼みの便りがあった」（同）

「路郎はその後（筆者註・S6年路郎44才）たのまれて堺市民病院の事務長の職についた。当時の院長から「君は川柳の第一線を退くか、それとも事務長をやめるかどちらかハッキリしたらどうか」と膝詰談判を食ったことがあった。これは路郎が事務長としての手腕をかっての院長の要望だった。元より事務長の職はその頃の院長がむつかしい人であったので、路郎君ならうまくやってくれるだろうと、さる人の紹介でなったのだから、強いてかじりついていなくてもよかったし、何時やめても家庭では文句をいうものもなかったから「それだったら今日限りやめます」とあっさり答えたので、あての外れた院長は「まあそういわんでも」とよりを戻しにかかったことのあったのを憶えている。

院長は或日、お供を連れて私の家へ訪ねて来られて私に「こんな家に住まなくても、もっとよい家へ住めばよい」と暗に事務長の職に本腰を入れるなら優遇するぞといわんばかりの色気をほのめかして帰られた。私は万事路郎の意志の働く範囲で暮らしているのだから、院長の親切は唯聞き置く程度ですましていた。病院へ帰られた院長は「あの妻君、馬鹿か」とあたりの人に言っていられたそうだが、人間は馬鹿と言われる位気持の楽なことはない。利口にみえるために苦労したり煩悶したりしている人が世間にどれだけ沢山いることか。路郎は生きんがための職業と、川柳とを天秤にかけて常に均衡を保っているが、どちらを選べと言えば、一も二もなく川柳と答えるであろう」（川柳雑誌三六二・古稀特集・麻生葭乃）

次号予告

麻生路郎物語(16)は

―路郎〝妻を語る〟―

ご期待ください

アローハ・ハワイ

川柳塔同人ハワイ吟行記

橘高薫風

プロローグ

ハワイ行GOのランプか月が出る

午後九時の出航予定が遅れてタラップを上ったのが九時過ぎ、折しも羽田の東の空に月齢十九・五の赤い大きな月がぽっかりと出る。ボーイング747ジャンボジェット機、定員三百六十一名、すでに飛翔の呼吸は整っている。出発!! 私の席は16J、窓際だから窓外の景色はほしいままである。王冠のような街の灯の輝き、川崎も東京も瞬時にして後方へ消え去る。高度はすでに一万米を越えたか。時速八百粁の上に時速二百粁以上の追風に乗りハワイまでの往路は五時間半である。二時間半で日附変更線を通過。窓外は雲海、雲の樹林、波濤、砂漠、その変化の美しさ。雲の彼方には星が目よりも下に点在し、しずかに後方へ推移する。心なしか地上から見る星とは光も異るようで夢幻の世界だ。私は、シャガールの絵のように宇宙を漂う。

ハワイまで星を関して来たりけり

夢幻の中の夢から、夢幻の中の現実に戻されたのは、雲の断層から一条の朱がさして来て、漸時海綿ににじむように濃さを増して行く美しさだった。暗黒の空には、雲の白を境に、赤橙黄緑青藍紫が微妙な色彩を積み上げる。旅情の昂まりはここに極まる。

明け切ると南国の青空だ。午前七時過ぎすでに目的のオアフ島を俯瞰していた。

われら迎うオアフは波のレイかけて

カイマナ・ホテル　インペリアル・ルーム（二条の間）

美しい町

三井酔夢

雲海の暁冴えて神在わす

ハワイが近くなった頃、ジェット機の小さな窓に鮮烈な二色の彩を見た。かねて聞いていたが、日の出の壮観は素晴らしい。この感動を句にと思いつつ力足らずでホノルル空港に到着した。

アローハで緊張感がまずほぐれ

華やかなムウムウのガイド嬢が開口一番「みなさん、ハワイ語を覚えましょう」と幼稚園児のように全員声を揃えてアローハを繰返す。アクセントによって〝今日は〟〝さようなら〟にもなる素朴なハワイ語は私達をなごませてくれた。

ハワイにも栄枯盛衰風が舞う

パールハーバーの出遭い

野村太茂津

ヌアヌ、パリはその昔、カメハメハ大王がハワイ統一を成した古戦場跡。断崖絶壁の山と眼下の美しい町が見渡せる。ヌアヌとは涼しいの意。烈風が吹き上げて衣類をめくるから御用心とはガイドの弁。

安らかに眠れ御霊にうずくもの

パンチボールは摺鉢型の死火山。山頂の火口跡に約二万人の英霊が眠っている国立記念墓地。広大な緑の芝生と大樹、その芝の緑にわずかに見える矩形の墓碑の列が、整然と並ぶ静寂な大公園の感である。ところどころに供華された南国の花に、人間の絆と悲しみをかい間見た。かっての砲台跡の展望台からは、ホノルルの街と海の全景が一望され、我々の泊るアラモアナ・ホテルも教えられた。

帰途、葬式に出会った。これが終るまでバスもストップ待ち。空の青さがなせるわざか、じめじめした暗さがなかったのに救われる。

緑の芝生に掘り起された黒い土、立派な寝棺、参列者の去った淋しい椅子、強烈な花束の色、生者死者無縁に見えて明日はわが身ぞの思いが通り過ぎた。

絵はがきに非ずワイキキ椰子がゆれ

イオラニ宮殿、カメハメハ大王銅像、州政庁、フォスター植物園、ハワイ大学、ワイキキの浜辺…とめまぐるしい。ハイビスカス、オーキッド、プリメリア、ブーゲンビリア、アンスリアム、ハード、オブ、パラダイス……覚えきれない花の名も多い。

昼食は、マノア渓谷の奥にあるパラダイス・パークで、夕食はホテルの豪華なタチヒアンショウを楽しみ乍ら……。

十九時間の時差にもめげず、見るもの、聞くもの、食べるものすべてが、長い豊かな第一日目であった。

夜も更けてドル勘定が合いませぬ

真珠湾恩讐越える身を責める　太茂津

観光—見学—拝観—巡拝・日米合同句会吟行決定の日、真っ先に浮かんだことは、真珠湾の参拝だった。ふっと数珠を持って行こうと考えた。観光見学は真珠湾巡り以外の場所にして、此処だけは何故か、「参拝」でなければならぬと心に決めていた。

真珠湾巡りの船上で説明書を読み、日本語のガイド放送や英語の諸所に出てくるジャパン軍の片言を拾いながら、老兵としてやり切れぬ気持である。早くこの場から逃げ出したい気持ちになって暫くは落ち着かず瞑目して慎めていたが、脳裡に去来する戦争体験と重なり合い、悩み、責めさいなまれ、古痕の疼きに耐えている自分に目覚め、戦艦アリゾナ、ユタ号の錆びた鉄の甲板を、真珠湾の波が静かに洗っている前に来たとき、思わず自然に何のためらいもなく掌を合わしている自分に気付いたのである。

呪縛とも水漬く屍に立ち竦み　太茂津

米将兵の戦死は三千六十七柱だという。戦艦「アリゾナ」と、運命を共にした一千百二名、そして元戦艦「ユタ」の五十八柱は今なお、たたきのめされた艦内に閉じこめられたままになっているという現実を拝んだとき、ギュッと締めつけられ、突き刺さる胸の疼きをどうしようもなかった。立場を代わっても同じ戦士として闘った私として、そのときは敵味方に分かたれていたが、その立場に立てば同じ戦友である。若し私が現世にアメリカ人として生まれ、戦士として「ユタ号」に乗り組んでいたとすれば、やはり青春を賭けて戦い、そしてあのように水漬く屍となって散華したであろうと思いに耽るとき、彼等は同じ戦友兄弟であると断じるのである。少くも私は、そのとき、ハワイ吟行決定の日に思ったことが正しかったと、私なりに胸に言い聞かせ納得している。

ユタ洗う波に言葉のある如く　太茂津

いつの間にか真珠湾周遊観光船「アドベンチャー号」は湾内の「フォード島」を周って帰路についていた。

同舟の各国人はそれぞれどんな感想を受けたであろうか、言葉が通じたら尋ねてみたかったが、私はこの日の感動の出遭いを尊いものとして、いつまでも大切にしたいと思う。ハワイ吟行の大きな収穫である。

夢のハワイ観光
日米交歓川柳大会

大路美幸

ハワイアン航空（マウイ島空港）

ハワイの空も海も青かった。川柳塔を主とする我々日本川柳団四十名は、予定通り一月二十一日午後一時、ハワイ、ワイキキビーチ、カイマナホテルに到着した。バスを降り立つ西尾栞副団長と、出迎えの前山北海氏との三十年ぶりの、感激の握手により、日米交歓川柳大会は始まった。思えば三十年前昭和二十一年八月二十五日、来日の北海氏を囲んで、路郎、葭乃、普天、緑雨、栞各氏らが、大和の平群村正光寺で夢見た日米交歓川柳大会は、今、茲に実現したのである。

日米交歓川柳大会は、カイマナホテル二階のインペリアルルームに於て、参加者六十五名の大拍手のもと午後二時四十分、島居百酒氏の高らかなる開会宣言のもとに開かれた。司会者、佐藤秀山氏の説明によりこの広間は、京都二条城の大広間をそのままに建てられたものであることを知った。若本多久志訪米団団長の挨拶に次いで、後藤保雄博士のハワイ日系人の輝やかしい歴史についての講話は、延々一時間に及んだが、少しも退屈させず、最後に二、三の質問をはさんで笑いと拍手のうちに終った。十分間休憩の後、野村太茂津氏の「アローハ」の挨拶から、入選句発表が行われた。

入選句

（平抜、佳作は誌面の都合上一人一句）

太茂津、栞両氏は日米の秀句を別々に抜句

兼題「判断」　野村太茂津選

判断がよくて理想を追いかける　岳人
信念に徹し判断あやまらず　北海
判断へ時計の針が廻るのみ　花梢
隅にいて寒い判断つけている　美代
判断がついて仰げば青い空　風影
（人）判断を迫られ海鳴り聞いている　美幸
（地）ふみ台になる判断で子を信じ　酔夢
（天）判断を夫の遺影に問いつめる　美幸
（人）判断はどうあろうとも飲めばよし　暁舟
（地）混乱の中に判断夫静か　雪女
（天）世相の判断四捨五入に突き当り　暁舟
風雪を越え判断に迷わない　太茂津

兼題「観光」　林蒼蛇楼選

ワイキキの浜辺で味わう観光地　光子
お土産に振り回された旅四日　安代
夫人同伴夜の観光の物足らず　薫風
空を行くてんやわんやの旅鞄　キミ
観光の衣裳直しに迷うてる　弥生
観光に来て戦跡に頭下げ　俊夫
観光へ母に見せたい山と河　快夢起
（人）観光へ郷土芸能甦り　百酒
（地）積立てて来た観光の忙しい　雪女
（天）旅の恥かき捨て絶えぬ観光地　形水

兼題「躾」　菊沢小松園選

舞扇五枚コハゼにある躾　シズコ
逆らわず祖母が躾る丸い声　としよ
もらわれる猫にもきびしい躾する　千万子
子等の靴躾の角度に脱いであり　漫柳
嬉しい日躾の糸も弾んでる　敏
我が児より愛犬の躾に精を出し　草海
妻になる躾家紋のある袱紗　森中　恵美子
社長まだ躾を受ける老母があり　多久志
家柄を言わずに母は娘を躾け　河舟
躾けても外は自由の風強し　彩珉
（人）女の子だから躾きびしい母になる　雀踊子

(地)靴脱がすママへ車内の目が和み　重人
(天)躾糸取る時女に返ってる　千寿子
嬉しさについ忘れてた躾糸　小松園

兼題「波乗り」　**市岡暁舟選**

波乗りのスリルへ知らず目を外し　寿美礼
真っ裸赤銅の肌波に乗り　伯雲
乗るよりも見るのが楽しい波乗りだ　正雄
波乗りは見るだけにする齢となり　翠峰
一瞬の機に盛り上げる波に乗り　碣雄
波のりの背に夕焼けの素晴らしさ　栞
(人)波乗りに似た人生のうきしずみ　醉夢
(地)巻波を一瀉千里と斜に切り　蒼蛇楼
(天)波乗りの様に浮世を揺れにゆれ一つ葉
波乗りへ七転八倒さらけ出し　暁舟

兼題「番　組」　**西尾　栞選**

番組も一段落と茶をすすり　カロ女
共同で作る番組楽じゃない　雪女
番組が進むにつれて汗をかき　紅渓
番組の様にこの世は暮されず　拝山
一筋の芸を番組買いに来る　暢
(人)ナツメロの番組だけは父のもの　醉夢
(地)番組の女房を別の人と見る　小松園
(天)往年のスター裏番組に見え　柴田恵美子
(人)人気番組またコマーシャル顔を出し　秀山
(地)いざこざを避けて番組いろは順万里歩
(天)番組へ孫が出るのに家ぐるみ　三石
番組の順序をかえる時の人　栞

兼題「レ　イ」　**前山北海選**

銀婚の旅にうれしいレイを受け　千代子
老夫婦しきりにレイをかけたがり　茂美
レイ受けてハワイキッスの早い事　美与子
レイ掛けて天下を取ったよい気分　百合子
レイかけてゆめのハワイを夢心地　武雄
卒業生レイに埋もれて嬉しそう　小雪女
似合うじゃないの力士もレイかけて　千梢
レイ受ける首はおじぎをする姿　摩天郎
胸にレイ一期一会の人となる　維久子
(人)孫の数だけキャンデーのレイを買い　蒼蛇楼
(地)感激の肩抱き合ってレイを受け　〆女
(天)歓迎のレイ時差ボケを吹っ飛ばす形水
身をかがめ孫の手からレイを受け　北海

午後六時三十分、ワイキキの落陽の美を背景に、市岡暁舟氏の司会で、先輩柳人への黙祷、林蒼蛇楼氏の食前の言葉（仏式）により和やかな交歓会が始められた。先ず若本多久志団長へ磯島雪女さんから、西尾栞副団長へはゲーンス美千香さんから夫々ハワイの美しいハイビスカスのレイが贈呈された。前山北海氏は、挨拶の後、若本団長へ、ハワイの幸福の神「チキ」の木彫を贈られ、富樫主席領事、吉上ハワイ日系人会長、平井ハワイタイムス社長、若本多久志氏、中島生々庵川柳塔主幹（代読・橘高薫風氏）、麻生葭乃さん（代読・西尾栞氏）の順で、各位、ユーモアとペーソスに溢れたメッセージが述べられた。そして磯島三石氏より訪米団一同代表、宮西弥生さんへ、土産品が贈呈され、日本商工会会頭、田村大一郎氏により川柳への万歳、上田紅渓氏により日本川柳訪米団万歳、島居百酒氏によりハワイ川柳ウイロー社万歳が夫々三唱された。

ワイキキの浜辺での万歳の声は、遙か太平洋の彼方、日本へもきっと轟いたことであろう。そして、地下の麻生路郎を始めとする先輩柳人も、きっと聞いてくれたであろうことを信じつつ、交々、再会を約し、固い握手を交して別れた。時に昭和五十一年一月二十一日午後八時三十分。

（日時はハワイ時間）

川柳訪米団（四十名）

若本多久志、西尾栞、西尾美与子、菊沢小松園・菊沢すみ子、大坂形水、岩本雀踊子、橘高薫風、八木摩天郎、野村太茂津・野村キミ、島居百酒、藤岡花梢、岩田美代金谷和子、和田維久子、米沢俊夫、森中恵美子、藤村〆女、板尾岳人、板尾さよ子、若宮武雄、榎本光子、垂井千寿子、平野百合子、大路美幸、天正千梢、宮西弥生、柴田恵美子、内芝としよ、塩満敏、樫谷漫柳玉置重人、玉置千代子、伏見茂美、高橋千万子、三井醉夢、坂本安代、伊藤暢、伊藤シズコ。

ハワイ川柳会（二十五名）

上田紅渓、磯島三石、磯島雪女、林蒼蛇楼田中万里歩、竹川河舟、市岡暁舟、松田彩

珉、築山快夢起、前山北海、満生拝山、津島十吉、石崎稠雄、石井小雪女、太田正男谷所一つ葉、佐藤秀山、合田翠峰、宮玉蔦弥、大西伯雲、ゲーンス美千香、加川カロ女、橋本夫人、野村草海、小島風影。

（順不同・敬称略）

マウイ島観光

玉置重人

三日目の朝もやっぱり抄り卵
コーヒーは口に合わないアメリカ調

ハワイ第三日目マウイ島観光の日である。例によって早朝起床。朝に弱い筈が少しも苦にならぬ。遊ぶ時の人間は勝手なものである。

アメリカと手真似で話す禅問答

ホノルル十二時十五分発の飛行機で一飛びでマウイ島格納庫のHAWAIANA—IRLINESの文字が印象に残る。

マウイ島着十三時一〇分、早速バスで島内観光旅行に出発。バスガイドは一世の田村フミさん。

手初めにガイドはサンゴ買わせる気
黒サンゴ女　女の目が光り

バイキング料理の昼食後サンゴ加工場を振り出しにバスは走る。

観光のメダマに小結高見山

ヌアヌ・パリ古戦場

観光で稼ぐマウイの花の数
観光の智恵にケネディダシにされ

名所針の山でケネディ岩の説明を受けて日本の亀石ライオン岩の類を思い出しておかしくなってくる。

クリームの旨さを褒めてマウイ島

世界第二の菩提樹のある公園でハワイ名物アイスクリームに舌つづみをうつ。

写真撮れとガイドは景色ほめ

マウイ島自慢のゴルフ場で思い思いのポーズでシャッターを押しまくる。

日本の舌に合わしたレストラン

其の名もヤエスレストランで和風の夕食ビールはキリン、酒は特級久し振りの煎茶が殊の外おいしい。

運ちゃんも一役買ったノド自慢
合唱は螢の光でフィナーレ

十九時一〇分レストランを後にノド自慢の合唱の中暮れなずむ国道をホノルル行二十時発の空港へマウイ観光の疲れもなくバスはひた走る。

マウイ島その一日の早いこと

常夏の国

宮西弥生

アラモアナ・ショッピングセンター

この度のハワイ旅行目的の一つであるこのセンターは、世界で最も大きなセンターの一つで、一日に一〇万近い客が訪れるという。一五五軒の商店と二七軒のレストラン、買物、食事、娯楽等が楽しめる。

何よりも嬉しいことに、日本語が自由にしゃべれることと、買物しやすいことにみんなは財布をゆるめがち。

ここだけは時計を止めておきたいとこ
観光よりショッピングの好きな日本人

流石に常夏の国ですべてオープン。人々

はカラフルなミニスタイル、ムウムウ、ショートパンツ等々が日やけた肌に実によく似合っている。中でも

スタイルをかくすムウムウ日本人

というのもある。お金と暇があれば是非訪れてみたいところである。

パラダイス、夢のワイキキにて

流石に世界の人々が夢の休日を求めて集まる楽園にして、眼下に眩しいばかりの碧い空と碧い海がゆったりと展がる。

早速、水着姿で海に飛び込む。何んと冷たいこと。外は三十度を下らない気温なのに思わずブルブル。それでもワイキキ焼けを土産にすることで必死。

ワイキキの浜に酔うてる顔つねる

人々は、そのカラフルな舞台で体を焼きしゃべり、本を読み、満開に咲くビキニの花々の実に見事。

ワイキキのここだけ国境ないビキニ

老いも若きもこうして大自然の楽園に酔うことであろう。今日も、明日も。

小遣いとビキニあったらここ天国

ご挨拶（日米交歓川柳大会）

本日茲に、栄誉ある来賓各位をお迎えして、念願の日米交歓川柳大会が開催されました事は、我々の最も喜びとする処でございます。

川柳訪米団長若木冬久志氏へ大会委員長前山北海氏から記念品贈呈。（写真がその記念品）

もとよりこれは、ご当地、ウイロー川柳社の皆様が、昨年来いろいろとその準備に多大のご熱意をお示し下さいました賜ものであり、深く感謝の外はございません。

ウイロー川柳社は、ご創立以来、我々と同じように亡き麻生路郎先生のご指導によって、たゆみなく川柳の道にご精進されますと共に、路郎先生亡き後も、我々川柳塔社との姉妹関係を深めて下さいましたその暖いご友情が、今日茲に実を結んだものと存じます。

現在、日本には四百数十社の川柳グループがございますが、海外に於て、こんなすばらしい姉妹グループを持っているのは、我が川柳塔社を措いて外に無いことを思います時、我々はその光栄と名誉をしみじみと嚙みしめ、改めて皆様に厚くお礼を申しあげる次第でございます。

顧みますれば、私が初めてご当地を訪れましたのは一九六二年、今から十四年前でまだ観光などの自由渡航が許されていなかった頃でした。ホノルル空港へ着きました時……路郎先生から、前以てご連絡をして頂いた関係もありましたが、前山北海さん古川魔花麗さん築山快夢起さんその他二、三の方、すべて初めてお目にかかる方々でしたのに、暖いお出迎えを受けて、お一人お一人から、馥郁たる香りのレイを、顔も埋まるばかりにかけて頂きました時は、うれしさに胸が一ぱいになり、川柳によって結ばれた友情の有難さをつくづく感じたものでございます。

その時、思わず詠みました句は

「友情のレイ、川柳が匂うて来」というのでした。

更に、その翌日、山の手地区の、「夏の家」という料亭で、私の歓迎パーティーを兼ねての句会が開催され、席題二つも選を仰せつかりました。その時の天に抜きました句を今でも覚えておりますが、加川カロ女さんの

「外遊をさせて女と手を切らせ」

というのと、斧平さんの

「肩書きが笑えぬ顔にしてしまい」

であったように記憶致します。

その後、二、三回、ご当地へお伺いしておりますが、その都度、同様のご歓迎を賜っておりますことも、やはり川柳の畑に生きて来たおかげだと、まことに感謝に耐え

ない処でございまして、今後、命ある限り川柳の道に精進致しますと共に、ハワイ川柳人との交遊を、さらに、さらに深めさせて頂きたいものと念願致すものでございます。

この度は、お言葉に甘えて、すっかりお膳立をして頂いた所へ、大勢押しかけて参りまして、いろいろご厄介をかけておりますことを、重ねてお詫び申しあげて、ご挨拶と致します。

一九七六年一月二十一日

川柳塔社訪米団代表

若本多久志

・近作・

今治市　月原宵明

休稽の婦警にあった少女趣味
粕汁が匂うある日の雪もよい
女史という名にネックレス三つ吊る
奴凧空の無限へ動かない

大洲市　米澤暁明

替え玉と知ってあしらう面白さ
貴賓席堅くなってるのは代理
お仕合せ昔の女から聞かれ
美しき別れ男のエゴイスト
抵抗をする気か妻も爪を染め
絹糸の強さか妻がつなぐ糸
酒今日は味方に思う不仕合せ

岐阜市　市川鱗魚

青い鳥探しあぐねて句に生きる
うたかたの生命かなしく句に生きる
遺書となるかもしれぬまま句に生きる

東京都　池口呑歩

勿体をつけて数の子食べさされ
一九七六年ご用始めの名は消えず
忙しさ七草行事さえ忘れ
今年からやる気年頭から崩れ

今治市　長野文庫

丸煙抄

菊沢小松園選

ふる里を持たぬ女のわらべ唄
まだ泣ける女は倖せかもしれず
つまずいた日から人間臭くなる
出る杭を打ってる奴も出世せず
お互いに値踏みされてるとは知らず
一年の時効にも似て除夜の鐘

新宮市　松田一郎

あきらめる事にも慣れた物価高
正論がまた負けている多数決
丈夫な子に育ててすり傷絶やさない
汗かかぬ仕事を合理的という
セールスのカバンに詰っているお世辞

新宮市　おか　とみひさ

情熱の火種を雑誌から拾う
平凡の良さに気付いた虹を見る
真顔で向き合うと対話の無い夫婦
手を出せば摑める幸で気に入らず

三重県　川上富子

もう元に戻れないのも女です
白菊の気品に鋏ためらわれ
まとまらぬ髪へブラシのヒステリー
聞きわけがいいからよけい買いたくて
人生は復線会うたり別れたり
何もかも育てて土は語らない

和歌山市　樫村ふみよ

人づまとなにを掟にして逢おう
妻のハガキに老眼鏡を買いました
軽い疲れにおんなの髪匂う
帽子掛けに父の暗示がかけてある
吊り橋が見えて卵を持ちなおす

富田林市　定金冬二

聴診器男も乳首ある寒さ
善良な市民で遊歩道歩く
みぞれの夜過去ふりむかぬ主義なれど
入院の荷物の中の正露丸

大阪市　芝原路春

どん底で二月の草の匂い嗅ぐ　豊中市　高橋古啓

毛糸玉ゆるゆる解ける幸せよ
アイシャドウ見つめるものを持たぬ眼に
くれないの真実を告げ褪せましょう
星の子が背負う掟は星のもの
微笑めば霊長になるふしあわせ　島根県　安達潮音

千万円の夢買う列を笑うビル
うるさは二人に任せ老いは老い
心臓を春の陽ざしよなでてくれ
賀状書き命の春をたしかめる
書き添えた老の便りもある賀状　東大阪市　崎山美子

行きすぎの化粧に自分見失ない
振り子にもリズム変えたい日のあせり
下戸にしておくには惜しいのどをもち
除夜の鐘母の言葉ににたひびき　和歌山市　西山幸

言葉より握手で語るめぐりあい
事始め働く音が帰って来
朝のバスやる気感じぬ顔ばかり
澄んだ眼が大人の嘘を許さない　岡山市　時末一灯

割算へ二人端数を抱いて寝る

傷あとをネオンが舐める雨の街
偽りの誘いさ美しすぎるもの
手折れても根までは抜けぬ花である　寝屋川市　柴田恵美子

はやばやと十大ニュースになるニュース
誠実に光あてたら色が褪せ
ひな人形の部屋で捕虜のパパねむり
ハワイくらいじゃ夢の字もうつけず　新宮市　清水元

鍵束の一つ昨夜の音で鳴る
フランス人形今日は淋しい顔をする
人前で見せた涙はすぐ乾き
ポルノ見る少うし阿呆になって見る　大阪市　堀口欣一

読めぬ文字ながら心の支えとす
朝の顔働く一家それでよし
兄いもうと一つ違いのままで老い
たこ焼きでひるを済せて恙なし　弘前市　小山内貞男

欲捨てて見てもやっぱり金が要り
セールスが心の隙にくいさがり
爆弾をつくり平和を口にする
吾れよりも下があるのを忘れまい　伊丹市　樫谷漫柳

冬来れば冬住しとする齢となり

譲られたので老人風に坐る席
出しても入れても郵便局の無表情
親は親なりに待ってるお正月

岸和田市　池田露子

宿題について行けないパパとママ
よく働らく女に匂うサロンパス
終りない命嘆いている造花
燃え尽きた愛の終りのハンを押す

豊中市　出口セツ子

枯葉散る病む目虚ろに捕えたり
ロビーの灯憩いに飢えし患者達
思わくを気にせず恐いと叫びたい

八尾市　納史葉

倖な女シナリオなどいらぬ
人を待つかなしみ残す終列車
階段に噂が落ちている団地
泣きに出たおまえも独り十三夜

西宮市　井上のぼる

何も彼も忘れて唄う夜が欲しい
三寒四温話のくどい老い二人
遠花火悲しいことを思い出す

豊中市　安藤寿美子

サーカスの猿よお前は幸せか
その後は好調らしく便りなし
帯きつく締めて妬心をおさえてる

計算高い人で結局損してる
帯結める位置へ女の意地を持ち
女も開き直りがある強み

大洲市　宮尾みのり

発車ベル別れの涙知らず鳴り
親切は小犬の横断待ってやり
閊かん振り便利な耳を持ちあわせ

河内長野市　井上喜酔

共白髪パントマイムで用が足り
本日休診失生風邪にしてやられ
石一つ置いて庭師に日が暮れる

諫早市　江副二牛

裏通り親子丼うまい店
社のピンチ三役そろってひかり号
女子大生小骨の多さきらわれる

島根県　岩田三和

膳手術する気になっているモデル
感謝する気持があって酒うまし
猿山のボスのとぼけに隙がない

尾鷲市　渡辺伊津志

いいくせのちらつく夢の中も恋
高砂や積み木へくさび打ちて候
お招ばれへ陽気の目立つお振袖

滋賀県　柚木踏章

和歌山市　桑原道夫

日記閉じれば道化の面に戻ってる
蹴飛ばせば石がくつくつ笑ってる
少年と少女吐息が白すぎる

唐津市　田口虹汀

留守番をしてみて解る妻の味
獅子の口千人風呂の水を吐く
病みつけど筆は離さぬ雪月花

和歌山市　松原寿子

舞いおりる雪へ柳は逆らわず
積雪へ文化とやらも泣き寝入り
悲しみを越える遙かな妥協点

備前市　武内雅堂

見送ればまた逢える日を信じ合う
人妻のもてなし妻に似てあわて
食パンを焼く母明治は遠くなり

鳥取市　勝山紫宏

父火葬煙も見えず灰になり
満鑑飾しずしず父と母がつき
ベストセラー日本の地肌のぞかせる

松江市　梅本登美也

貧乏という字が今日もつきささり
ポケットに値あげ以前のたばこの粉
学歴のない子に親は養われ

竹原市　鈴木かつ子

枯れたふりして雑草春を待ち
生きている倖せ子が来る孫が来る

鳥取市　徳田水滸

不機嫌な朝せかせかと姑が掃き
相性はぴったりだったのが別れ
木枯しへ雀もぴったり添って耐え

羽曳野市　麻野幽玄

エマニエル夫人へたぎる血は持たず
バラ手折る尼僧に飾る髪はなし
門開けて隣りはお歳暮待つ身分

大阪市　欄蘭

師の影を踏まずどころか殴りつけ
ささやかな買留め煙草十個だけ
彼岸詣善男善女ばかり居ず

大阪市　小谷清女

受け流す術も覚えて年重ね
此の先は言わずシャッター降しとく
賑わって正月風邪を置いて去り

新潟県　市川一峯

スト権ストしみじみと聞く駅時計
長靴を下げて子を待つ雪の駅
飲む段になるとやおら首もたげ

姫路市　大原葉香

流れゆく雲の自由を風はばみ
グリーン車に乗ればグリーン顔となり

錢使わなければ孫はついて来ず
岸和田市　池田香珠夫

草の根を分けて時効のつけが来る
殉教の城まぼろしの美少年
杖で来た見舞い患者にねぎらわれ
今治市　伊藤一郎

CMが見えぬと破産したそうな
玩具部で子が握ってる零三桁
しんどがる妻がスイッチまめに切り
今治市　真山国彦

洋凧が威張る日本の春の空
騙されて人を疑う知恵が付き
ペッタンの音無しで出る電気餅
今治市　古野伶人

何をする人で混むのか暮の街
大方は雲に隠した竜を描き
餅腹でそろそろ参る初詣で
今治市　渡辺南奉

スクラムへ一才半がいてくずれ
可も不可もない一年を満ち足りず
医師患者どちらも全治口にぜず
新潟県　高野不二

よろめきドラマ休んでほしい日曜日
新しい値をもう覚えたか販売機
頼まれる立場いつしか自惚れる
今治市　原田排珈皿

旅行カバン妻の心が行き届き
目には目をこわいマンガを子等は好き
尼崎市　中谷利美

仕込んでるつもりいつしか飼育され
割勘の円まで計算する女
大阪市　松本甫久路

清水の坂に老舗の香り買う
ふるさとも五十を越えた齢になり
橋本市　岩倉天彦

うたた寝の小皺のふえた母に着せ
そう言うなお粥ぐらいは炊くと父
大阪府　井上武松

天地人活けて竜年祝う屠蘇
歳老いて聞く除夜の鐘身に泌みて
今治市　蔦本昌道

相槌を敗北感が打ちそびれ
卒直に言えば傷つく言葉選る
今治市　園部正則

評論家立場変ればどんな貌
再婚のポイント子らにおく見合い
美唄市　青木仙人

言う事が言える若さがたのもしい
この先は言うまい丸く生きるため
今治市　大本バット

久し振り会えば旧友遠い耳
今治市　今井松花

田仕事の時計に国鉄もうならず
広島県　原田篤史

読めぬ程高い値が付く書道展
東予市　小山悠泉

講演にテレビに本に悪女売れ
八尾市　田中紀美代

胎動へ夫と子の名を書いて消し
宝塚市　吉田とんぼ

見られても良い事書いてる雑記帳
寝屋川市　福富隆子

にやにやと孤独まぎらす笑いかも
羽咋市　三宅ろ亭

ハイハイの二度目のハイを叱られる
大阪市　平井露芳

ご馳走の匂い意地でも上がらぬ気
寝屋川市　江口度

しめ飾りつけてマイカー寝正月
櫻原市　西本保夫

救急車今日は夫が運ばれる
名古屋市　大林曲ん手

正月も過ぎてへそくりも空になり
岡山県　長尾保

お正月孫はおむつを置いて去り
唐津市　田中紫浪

さいそくを電話でしているお年玉
唐津市　岩崎実

スタジオの幻滅ＮＨＫを出る
唐津市　山下勝一

仮名手本憎い師直あれも役
唐津市　岩下照沖

落し子の所詮竜にはなり切れず
社会鍋善意の愛が煮つめられ

業界のトップを進む風あたり
なわ張りの下に示談書埋めてある

グチはもう会社の門をくぐるまで
遺言はやっぱりボクをいましめる

ふとそよぐ葦に女は教えられ
倖せな妻の鼾で寝付かれず

がっちりと百円だけの子の電話
十指みなつかい美味しい松葉かに

うさ晴らす酒がだんだん荒れてゆき
参観日出来る子の親すぐ帰り

看護衣を脱げば天使も女なり
報道の義務で不幸を追いつづけ

よく笑う客乗せバスは走りぞめ
一言の書き添えうれし年賀状

産声のその時無神論は負け
玉子酒風邪を楽しむ夫婦あり

敗北でないぞ故郷へUターン　唐津市　桧垣岩光

父と子の体積だけの湯がこぼれ　大和高田市　岸本豊平次

ボーナスが出たのを市場で感づかれ

炭小屋の吉良には長い夜が明けず　熊本市　有働芳仙

寝不足の顔を照らした初日の出

あいさつへ待ってた俺の名が出ない　羽島市　伊藤静枝

来る賀状それぞれの顔話しかけ

陽の落ちる富士に満足目をとじる　松江市　岡崎雪美

大晦日若きいのちが昇天す

初釜の茶せんの音で祝う春　岡山市　船越洋之

青春が響いてこない掲示板

どの部屋もギターの掛かる合宿所　橋本市　森脇善彦

哀愁の町にきてます又来ます

恋マニア決して好きと言うてない　尼崎市　駒村岳麓

付き合いは一番後から誉める

初風呂に妻に語れぬ過去浮かぶ　兵庫県　高橋近江

ラブレター娘らしさにしてくれた

姿ない心の動き見つめられ　鳥取県　森田正

百円をかわいいサイフに入れてやり

三輪車孫の指さす方へ押し　鳥取市　小宮山みゆき

両親の敷いたレールをただ歩き

YESともNOともとれる微笑する　鳥取市　尾崎泰山

準備多忙終えれば暇を持て余し

母の胸へ届けヨチヨチ子の歩み　新宮市　西尾功

蟷螂の斧かエコーに切りかえる

餅搗き機買わず試食も遠慮する　富田林市　中村優

新年会同期の桜で〆られる

禁煙もできず値上に眼をつむり　高槻市　山田スミ子

自動扉が待ってましたと喫茶店

お互に振り向いていた行き違い　八戸市　安田紘

肩書きがとれたら声も丸くなり

変な癖つけて鍵穴ひとり住む　島根県　飯塚虎秋

舌づつみ忘れた若い塩加減

ぐったりと疲れただけの初詣で　泉佐野市　大工　静子

喋りたくない目数よみつつ編む　堺市　栗本　藤持

つまずいた石は可愛いいたまご形　唐津市　三浦　広坊

淋しくも枕辺の花が萎みかけ　大阪市　牧　ときを

見舞客また同じこと喋らされ　今治市　和田　宏

婦人年甘えてすねて暮れにけり　七尾市　松高　秀峰

洗濯も器具もいやだと中ピ連　鳥取県　加藤　茶人

よい天気今日はこたつを一人占め　唐津市　筒井　朴竜

店先を広く見せたい小商い　須賀川市　平栗　金太郎

子に賭ける親の気持ちに子は遠く　西宮市　朝山　千世子

団体の娘に逢うプランも入れて発ち

控え目な仕入れ問屋の月曜日

後継の無い万才が御慶売る

余世なお一花咲かす芸を持ち　八戸市　島田　昭治

貧乏も悟ったような顔してる　堺市　堀畑　日々子

カセットの亡夫の小唄に聞きほれる　松江市　本庄　快哉

倒産の工場も初日照りかえし　大阪市　新川　貞祐

天は二物を与えず胃は丈夫　岡山県　池田　半仙

内職の配達自動車止める路地　鳥取県　大坪　天涯

新婚のムードで祖父母の離れ建つ　尼崎市　大垣　たもつ

耳かしてくれぬ雑音の中にいる　岡山市　井上　柳五郎

気楽にも言い放題で平でおり　島根県　松本　文子

狂い咲く桜を哀れと想う日も　出雲市　藤井　晴月

夢破れ夢で綴った幾歳月　新見市　吉田　落猿

順調に心臓動き年あらた

出雲市　高見鐘堂　　三カ日隣りの猫が居候に来

正直に打ち明け年金停止され

高知市　竹崎　寛　　日米交歓川柳大会に出席

もみくちゃで生きてくくらし笑い合い

名古屋市　吉田文枝　　旅のつけ羽田でまわる荷の重さ

大阪市　伊藤　暢

選者交代の弁

菊沢小松園

水煙抄を見て早や一カ年、その間私なりに色々と考えさせられまた教えられたことの多かったことを感謝している。毎月の十句に努力と苦心のあとを見せて発止発止と息も継がせず打ち込んで来るような劇さを感ずる、勉強型もあれば　悠々迫らず我がみちを行く泰平型もある。毎月の句の推移　中に得意と逆境と笑いと悲しみがそれとなく渦巻いているのも人生詩としての川柳の面白さでもあり恐しさでもある。とあれ一カ年反って考えさせられ教えられ鞭鞭されたことの多かったことを思って、お互い明日の川柳へ向って努力をこの上ともに祈るのみである。

夢を見る男

—旅人鑑賞—

香川酔々

往来で
夢を見てゐる男にて

現在の句会で、この句を提出したら　没になる可能性が強いのではなかろうか、いまどき、往来で夢でも見ているものなら　あの世行きが早いという評と共に。

作家論を展開するには、年代順にその作品を検討しなければならないのかも知れないが旅人一巻は、年代順ではないし、まして、本稿は、旅人を筆者なりに味わってみたいと考えているのであるから、素直に筆を進めるつもりである。

さて、作品に戻ろう。この句も路郎青年期の作品と思うし、路郎の当時の気持ちだと考えるとおさまりがつく。

この句のすこしあとに、

戯れに死ねれば
こころやすからん

という句があるが、観念的には、この句に引続いているようである。さらに、

ひとり立てば
風ふところに入りにけり

と納めているようでもある。

無常とや
猫も錦魚も死んで見せ

実は、この句を読んだとき、筆者には、漱石の「吾輩は猫である」が、スッと連想されたのである。

「猫」の巻末…

次第に楽になってくる。苦しいのだか有難いのだか見当がつかない。水の中に居るのだか、座敷の上に居るのだか、判然しない。どこにどうしていても差支はない。只楽である……

路郎が漱石に傾倒していたことは、東野大八氏の「麻生路郎物語」を読むにいたって判然とした。このことを、不朽洞会の先輩に尋ねてみたかったのである。

お互ひの世にせうとして
かどがたち

この句も、草枕の冒頭の一節を思い出させてくれる。

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」

有名な文章である。

路郎が漱石のファンであることを、大八氏の労作で知ったとき、筆者は非常に嬉しかったのである。筆者も漱石のファンだからである。

この句のイメージが、後年の作品

ふるくとも
ぼくには仁義礼智信

に続いてくるように思われる。

—同人吟—

秀句鑑賞

——前月号から——

若本多久志

灰を掌にのせて人間など思い　工藤　甲吉

哲学的思索の一端が句になっている。我々も人間である以上、必ず死を迎えねばならない。仏教的にいえば、いつかは灰となって土に還って行くのだという訓えでもあろう。

先日亡くなった中国の周恩来首相の遺言を連想して、この名句に感慨を深くした。

北山杉　気ままなポーズ許されず　傍島　静馬

類想の句は、前からよく詠まれているが、北山杉に結びついた着想に讃を送りたい。

黙禱に前のヒップを見ていたり　不二田一三夫

誰かの句に、「告別式うしろの方はゴルフ談」というのがあったが、共にあさましい人間の一面をよく抉っている。

追いつけぬ深さを刻む皺と知る　遠山　可住

スッポンの特効信じる日の淋し　斎藤三十四

霜枯の菊に吾身を振り返り　藤井　春日

親鸞聖人の言葉にさえ「徒らに明け、徒らに暮す裡、いつか老いの日の白髪となり果てぬる身の有様こそ悲しけれ」とあるが、無明凡愚の我々が老いを嘆ずるのは当然、しかしそこに何かを求めてやまない真摯な気持がうかがわれて床しく感じる句である。

音もなく流れる水に似て夫婦　都倉　求芽

実感の句とすれば、実に羨ましいご夫婦、人間不信、複雑怪奇の現代世相の中にも、こうした淡々静寂の暮しがあったのかと、深く感銘した。

妻の座にいつかL寸着て坐る　阪上十止庵

人生のユーモアとペーソスを入り交えた秀句といえよう。L寸がよく利いている。

手鏡をのぞく女に隙がある　小浜　牧人

女性のある一面を鋭く捕え、その心理まで描写されているような名吟といえよう。

人妻のせめて髪の香を盗む　有信新之助

とりようによっては誤解を生む句だが、真・善・美を求めてやまないアーティストの場合、当然の衝動であり、よくその情景と心理が詠まれている。

肩すぼめて歩けば影も淋しげに　宮尾あいき

人間が何かの異変で逆境に落ちた時、味わされる淋しさを、巧みに詠まれている。しかし「朝の来ない夜はない」諺の通り、倖せを信じて強く生きて下さい。

ひっそりと病む老犬の瞳が痛い　玉置　重人

鋭い鑑察と心理描写の句として銘吟。最近の新しい傾向の句の中にも、こんな珠玉があることを喜びたい。

街路樹の下だけ都会の土がある　竹中　肖二

さらりと詠まれた句の中に、激しく移り変ってゆく現代風土への怒りと呪詛が盛られている。

乱れ籠　一人淋しい夜を包む　垂井千寿子

加賀の千代尼の句を想い出させる様な句で思わず人生の哀れさを感じました。愛別離苦の句として光っている。

散るもよし一期一会の秋の彩　水粉　千翁

くらしにくい世だと鳴いてる虫かとも　河村　日満

塔一つ抱いて紅葉の燃えており　錦織　文子

前記三氏の作品を特に鑑賞句に挙げたのは春夏秋冬の諷詠がややもすると無季俳句のジャンルを冒しやすい中で、これらの作品がそのギリギリの線で川柳の本質を守り切っている点に感銘を覚えたからである。

愛染帖

橘高薫風選

倉敷市　水粉　千翁
花嫁はあの日のわらべ歌に酔い
花嫁の不安へあしたこそがあり

青森市　工藤　甲吉
花嫁のしばし華やかなる孤独

大阪市　正本　水客
白雪は穢土を浄めてふりつもり
みちのくの酒酌み交わす雪の日ぞ
うしろ指ぐらい背中は知っている

岡山市　行本みなみ
水仙の斜面に人の影がある
ヒラヒラとさかな釣られた色になる

池田市　杉田絵巳子
ピストルを向けるとポストが赤くなる
柩より重さをいたわる声がする

東京都　山根　白星
牡丹蒼白推理小説極まるとき
小箱程の家のすみずみ母がいる

備前市　武内　雅堂
追憶の火の見櫓は昏れのもの
心中の記事から移る株価欄

今治市　園部　正則
旗振っている青年の痩せた肩
解剖の音を聴いている男盛り

島根県　堀江　芳子
あっけなく去ぬ末っ子と正月と

和歌山市　桑原　道夫
風の私語ところに泌みる独りぼち

鳥取市　河村　日満
泣き虫の少年ラッパを離さない
遠吠えに寒空キリリともしない

島根県　小砂　白汀
凧の字の龍なつかしく父子立つ
風邪にねて三日政治にうとくなる

唐津市　岩下　照沖
天網粗にして風花をゆるす
ポケツで握るゲンコツ無精卵

八尾市　大路　美幸
死とは何焚火はかくも美しき
その中に名の無き賀状女文字

尾鷲市　渡辺伊津志
火葬場の煙まっすぐ昇天す
ワイン飲む西洋的に酔うてくる

小松市　馬場　魚山
古典への回帰を志す真珠
蠶台の声大根に化身せり

岡山県　直原七面山
焼け死んだニュースの後へ寄席囃子
好い年令をして凧揚げた頃の夢

和泉市　西岡　洛酔
面白く広がって行く娘の噂
ゆれ動く心を女の目が捕え

岡山県　白岩　文衛
しっとりと汗ばむ春が僕は好き
かゆいとこ屈く女で間が持てず

今治市　園部　正則
迷う日の空へ大の字書いてみる
なにくさすためかやたらとほめだした
無職でも名刺やっぱり欲しいとき

倉吉市　奥谷　弘朗
ひっそりと去る日やがてという思い

八尾市　宮西　弥生
還暦を迎えたとそを噛みしめる
思い出し笑いを妻にとがめられ

八尾市　高橋　夕花
花活ける後姿に影見せず
判断に非がない男の太い眉

今治市　原田琲珈里
落日に少し染ってすこし炎ゆ
女面傾くときにやすらぎぬ

和歌山市　沢山　福水
かけ込みが得意哀しい日本人
霊験が落ちる神社のコマーシャル

八戸市　小泉　紫峰
いつわりの夫婦で長い旅終る
芸の虫女ひとりの生きる道

橋本市　森脇　善彦
どか雪が止んだ青空春の色
二十年振りの再会名刺出し

岡山県　出原　敬一
ギラギラの苦海浄土に竜の骨

豊中市　高橋　古啓
ちぎれ凧狂い線路の先の黄昏

尼崎市　黒川　紫香
朱を溶いて今ひとときを塗り給え

今治市　大本バット
振り袖を着ても男の腕をとり

竹原市　三宅　不朽
落丁のある君だから僕だから

今治市　和田　宏
振り向けば振り向く女に遭うも旅

名古屋市　大林曲ん手
はるかなる夢を築いてゆく手紙

ふところへ抱けば海は静かなり

倉敷市　小幡　里風

矢印に鍵を合わせた日のゆとり　大阪市　西出　一栄

メモ持たず舌でころばし帰路いそぐ　島根県　堀江　正朗

子に味方されて嬉しいお茶になり　松江市　岡崎　雪美

竜年の初夢竜をのみこんだ　笠岡市　木山　遠二

嘘を言う大きな口を持った鬼　松江市　舟木与根一

指先の器用さ見ていてふと色気　和歌山市　西山　幸

友情の仮面で秘密に触れたがり　和歌山市　松原　寿子

嬉しくて鼓動を両掌に抱きしめる　大阪市　神夏磯道子

姑のきびしさで得た味かげん　今治市　原田　一風

君と居て祭太鼓が遠い夜　和歌山市　津田　与史

雪積り城は昔の詩うたう　神戸市　小浜　牧人

その嘘に尾が見えている女狐よ　東大阪市　竹中　肖二

春場所へわが家の茶の間活気づき　東大阪市　竹中　綾女

仲良しとわかる揃いの靴と服　大阪市　西川　誓二

底辺を掬わぬ政治を歯がゆがり　高槻市　若柳　潮花

病院で晦日に風邪をもろうて来　松江市　梅本登美也

魔がさした時のレールはよく光り　今治市　今井　松花

聴診器よりも話術が名医にし　堺市　高橋千万子

紅バラに近づきすぎてふれたトゲ　大阪市　松本甫久路

日本も知らないくせにグァムへ行き　鹿島市　安達　潮音

高価安定という極限へ身の細り　滋賀県　柚木　踏草

反対の桝目が好きなアンケート　鳥取市　勝山　紫宏

喜寿叅寿米寿たしかな的である　伊丹市　樫谷　漫柳

家計簿は教養費で買う週刊誌　東予市　小山　悠泉

絵馬堂の竜が見下ろす初詣　富田林市　和田維久子

未来永劫なり止まぬ鈴ひとつ　大阪市　新川　貞祐

算盤も弱いが電算器も押し違い　松江市　本庄　快哉

閉じかけたのを開けさせる自動ドア　岡山県　長尾　保

ひとりでは着れぬ着物の柄選び　大阪市　宮尾あいき

いくつになっても嬉しい三カ日　岡山市　船越　洋之

追い込みの授業に迫る香港A　西宮市　藤村　〆女

雪景色心の垢を洗い去る　岸和田市　池田香珠夫

鶏小屋を見つめる猫の親子連れ　岸和田市　池田　露子

子より親が自慢のピアノ発表会　岡山県　池田　半仙

無理にした笑顔から血が引いてゆき　倉敷市　能登原白水

雪晴れが白磁の塔を浮彫りに　羽咋市　三宅　ろ亭

吹雪いてるからよし孤愁満たされる　新見市　吉田　落猿

幾坂を越えて振り向く老夫婦　平田市　久家代仕男

断酒会妻に決意をうながされ　今治市　越智　一水

滝壷で椿一輪目をまわし　今治市　蔦本　昌道

この人へ冗談言えぬ一本気　大阪市　欄　蘭

福々しい顔は七福神だけでよし　出雲市　高見　鐘堂

初夢の中では秀句が出たのにな　島根県　錦織　文子

も一人の私が魔女にもなりたがる　堺市　栗本　藤持

デートする相手あっても実りなく　呉市　槙田　英詩

飾りたい錦何処にも見当らず　八戸市　島田　昭治

淡い恋そんな昔もあったっけ　富田林市　岩田　美代

子ら翔けて立体感のないわたし

投句先きは

〒546　大阪市東住吉区湯里町1の25

（電話大阪・703・3046番）

正本水客宛

締切毎月十五日―（一人三句以内）

百人一首と川柳 (21)

富士野藤馬

六二　清少納言

夜をこめて鳥の空音はかるとも
　よにあふさかの関はゆるさじ

この歌は「後拾遺集」に「大納言行成、物語などし侍りけるに、内裏の御物忌に籠ればとて、急ぎ帰りて、早朝『鳥の声に催されて』と言ひおこせ侍りければ、『夜深かりける鳥の声は函谷関のことにや』と言ひ遣はしたりけるを、立ち帰り、『これは逢坂の関に侍る』とあれば、詠み侍りける」と詞書してのせられてある。それで、

呉越軍談を清少納言よみ　はつせ（一一36）

清少は早起紫女は宵っぱり　よしほ（一四九21）

と川柳に作られている。また逢坂の関がよまれてあるので、

百人の中へ関所を三つすえ　一徳（三六15）

敷島の百里の道に関三つ　木賀（八三12）

―他の二関は蟬丸と源兼昌

「夜をこめて」を借用して、

夜をこめて書いた双紙も枕なり　松風（一〇二11）

―枕草子

夜をこめて客の空寝を斗る也　志斗（六七22）

夜をこめて翌の芝居の嫁の髪　千之（一四〇5）

夜を込て船で呑んでか喰わんか　千之（一四〇5）

―枚方のくらわんか舟

清少納言は、肥後守清原元輔（四二）の娘で、深養父（三六）の孫である。「清」は清原氏の意「少納言」は呼名であり、当時の多くの女性と同じように本名はわからない。

結婚に失敗して離婚後、一条天皇の中宮定子に仕えて愛せられ、その才能が広く宮中の人々にほめたたえられた。年齢ははっきりしないが、二十六から三十までと思われている。西暦三年（九九二）に出仕し、長保二年（一〇〇〇）中宮定子がなくなられてからは、里へ帰ったのであるが、その後のことはわからない。

一条天皇には、外に彰子という皇后があり二后対立ということであった。その彰子の方に紫式部が仕えていたので、自然清少納言と対立的になっていたようである。

清女は、和歌の外に漢詩にも長じていたので、中宮が「香炉峰の雪は如何」とおたずねがあった時、だまって立って、御前の簾を捲き上げた。それは、白楽天の詩、

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聴く
　香炉峰の雪は簾をかかげて看る

を無言に示したのであった。この話は有名で後世錦絵などにもよく描かれているので、川柳もまたこれをとりあげている。

簾をかかげて清らかな雪見也　雨夕（三三36）

簾を巻く宮女雪より清らかさ　青露（五九1）

内みすに清女も見える雪の段　逸茂（一〇七24）

香炉峰雪より先に謎が解け　竹賀（一五二18）

香炉峰みかども舌を巻き給ふ　玉兎（八三10）

良智のほまれ大江山香炉峰

—大江山は小式部　小丸（一一八8）

勅諚で清女は雪の封を切り　魚交（九七6）

うしろつきばかり清少納言見せ　（安四義四）

—錦　絵

雪の簾みかども舌を巻き給ひ　寿山（一〇一14）

枕の作者するすると翠簾を巻き　一之（一一五23）

枕草子を書いた手でみすをまき　瓦舎（五五20）

清女の名著「枕草子」は、古今独歩の随筆として名高く、後世文学的影響は大きいものがある。

筆まめは名までせいしょう納言なり　（九4）

枕の草紙目の覚めた筆意なり　佃（七五32）

坐って居ぬは清き女の枕なり　三輔（九六12）

まくら草紙をえらんだも好の道　小丸（九一22）

くくり目のいいは清女の枕なり　木賀（九一22）

あに紫女に負じと枕わって書き　魚交（九六12）

女筆にて春の曙秋の月　叶（九四17）

外題では清少納言淫婦也　加多留（管26）

「枕草子」の書き出しに「春は曙、やうやう白くなりゆく山ぎは」とあり、それで、江戸時代になって「春曙抄」と題して出版されていた。「秋の月」は紫式部の「源氏物語」をいったものである。

また別に、春画のことを「枕草紙」と俗称されていたので、

清女が筆に画のあるを娘所持　巨眼（八七29）

清少納言御筆とかし本屋　箕山（四〇9）

などの戯作もある。

「春曙抄」の前書の中に、

「或説に、清少納言誓願寺にて出家して、帝のおかへりみをかうぶり、いみじき往生をとげて、彼寺に墓も有りと縁起に見ゆ。時代にあはで、一旦はおちぶれしかども、終焉のさまはいみじかりけん事、才ありし人のしるしめでたく候ふにや」

と書かれてある。

六三　左京大夫道雅

いまはただ思ひ絶えなむとばかりを
人づてならでいふよしもがな

この歌は、「後拾遺集」に

「伊勢の斉の宮わたりより罷り上りて侍りける人に、忍びて通ひける事を、おほやけも聞こしめして、守り女など附けさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければ詠み侍りける」

と詞書して載せられてある。この伊勢の斉宮とは、三条天皇の第一皇女常子内親王である。

道雅は、藤原伊周の子で、長和五年（一〇一六）には、従三位左近衛中将であったが、万寿三年（一〇二六）に、左京権大夫におされた。そうして天喜二年（一〇五四）に六十二才でなくなった。

川柳は歌かるたを詠み

歌かるた人づてならで下女取れず　川鳥（二八7）

川柳長屋　第十七集

頒価七百円（送料二百円）

発行所　東京都中央区新川2—25—15

東都川柳長屋連

不二田一三夫著　川柳寄席

A5版・4月30日発行　定価二千円（送料共）

発行所　大阪市生野区勝山南1—14—17

漫才作家くらぶ

秋田　實主宰　「漫才」季刊

復刊第一号（3月中旬発行）

定価三百円（送料百四十円）

発行所　上と同じ（不二田一三夫方）

評・書

垂井葵水遺句集

戸田古方

正直にいって、始めて葵水さんという名をきいたとき、少々抵抗を感じた。あの特長のあるマスクがそうさせたのかもしれない。和歌山は葵を定紋とする徳川御三家のお城下だった。「雅号ぶっちやけ話」で、葵水さん自身もいってられる。私も「一応迷わされた」一人であったのだ。

一柳友であるという以上に、特別親しく交わることもなく、葵水さんにこれという印象を持たない私は、書評を依嘱されたとき、困ったなと思う反面、冷静に批判できるかもしれないとも考えた。

遺句集再読の始めに、採録されている小文集を通して、葵水さんの輪郭を得ようと試みた。そして、最初に傍線を引いたのが、「白柳氏を悼む」文中にある「ナーンだ、川柳ッてこんなものか…」であった。私も、一二回上位に入選すると、尻切れ蜻蛉のように消えてしまった何人かの人を知っている。入るに易すく、達するに難い川柳の道がそうさせるのだろうが、葵水さんは筋金入りの俳句家系の末、二十年の俳歴がものをいったのか、僅か七年間で五千句を残していられる。白柳さんの誘導もさることながら、その精進、柳魂闘志満々がうかがい知られる。葵水さんは川柳の難路であることを熟知しながら、挑んでいかれたのである。

—**路郎賞ねらう詩魂に遠くいる**—

葵水さんは格好のよさなどはいっていられない。ガメつく貪欲に川柳にかぶりついてられたのがこの句でわかる。

二十年の俳歴をもっていられる葵水さん、「一分間柳論」で、活字になったときのことまで気にされる綿密さ。流石、一語、一語を忽せにしない俳句修業に徹せられているなと頭が下がる。だが、ひと度、川柳に踏込まれると、次の告白となる。

—**せっぱつまって裸の詩が生れ**—

自らの掘り下げに懸命に邁進、六面八臂。働き盛りの四十歳代から、命終の五十二歳まで文字通りの全力投球に終始された。学ばれた経済学をも存分に生かされた葵水さんでもあった。遺句の端々にもそれが如実に滲みでている。

遺句編集にたずさわられた方々によって、八つの見出しが設けられている。

冒頭は、葵水さんを一番葵水さんらしくする「母」、親孝行の句。その中で、

—**母終焉しばし地球をとめてくれ**—

には芯から打たれる。知命を過ぎた男の本当の涙は金色に輝く。

次は「心」、「路郎賞ねらう…」の句もこの中にあるのだが、その外に、

—**金が顔出して信念うろたえる**—

経済学を学びながら、そっぽを向け続けてきた私は、葵水さんに気恥しくて。

俳人葵水は、そのまま柳人葵水となった。柳人でありながら、気紛れな俳句留学なんて生意気な徘徊を続ける私の遠く及ばない自然との格闘というか、融合を見るのが「自然と生物」の中に光る球玉の数々、

—**車庫に入る終バス星にねぎらわれ**—

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

―枯れるものあるから枯野広くなる―
―立ち話別れたあとを犬が嗅ぎ―
を見つける。そして
―お隣の畑とつなぐ曼珠沙華―
に至って、いのちある句を感じさせる。
理想の夫であり、理想の父であった葵水さん、「家庭」の項には
―妻一語われに一語秋深き夜―
―握ってた豆のひと粒子がくれる―
の佳句を拾う。
「酒と女」では巻頭、色紙の句、
―ぶつかってゆきたいほどののみごころ―
を推したい。酒仙とまではいえなくとも、酒を愛し、醍醐味を卒業していられたのではなかろうか。
そして「男ありて」である。
その第一句
―捨てられた方が男である喜劇―
私はこの句がとても好きである。私は日ごろから、みつめれば、この世の中はみな喜劇、悲劇は喜劇であると思っている。そして枯れた句、軽味の逸、次の句に目がとまる。
―公私ともネクタイ曲ったままで居り―
最後は「旅」である。
―同じように座りとなりの膳のぞき―
葵水さんは川柳を通して、人生の最高の幸せに巡り合っていられたのではなかったかと思われる。葵水さんは白柳さんによって川柳に入られたのだが、白柳さんの自得された「人間陶冶」は健やかに伝えられている。
自らを批判し尽された葵水さん。
葵水さんの死は全く突然の死であり、勿論ご自身それをあきらかにされていた訳ではない。葵水さんは、公私とも油ののり切った人生の絶頂にいられたのである。川柳についても、色々構想を温めていられたであろう。
川柳わかやま吟社も燎原の火が燃え拡りつつあった。日を月を加える毎に盛んになりつつある最中であった。
その火は奥さんの千寿子さんと、盟友太茂津さんによって、幸いにも順調に伸びつづけている。「それでいいんだ」と葵水さんが満足しながら守っていられるに違いない。
遺句集の最後に、
―鈴虫に死ぬべき覚悟うかがえず―
を遺句としてのせられている。葵水さんが辞世の句として作られた訳では勿論ない。
死を知って死に得る人は稀であろう。しかし、偶然かもしれないが、全く辞世としてもおかしくないような気がする。
私は、葵水さんの川柳塔最後の四句の中からもう一句加えさしてもらおう。
―白蓮のひらいて嘘のない空気―
人が命終し得るのは、人の世の務めをやり遂げた時だと聞く。葵水さんこそ、白蓮の花を完全に咲かせた一人であったのである。

社告（川柳塔社）

51年度「路郎賞」選考委員に
橘高薫風

51年度「川柳塔賞」選考委員に
小浜牧水

（なお、薫風氏は52年度以後の「愛染帖」を当分専任。牧人氏を常任理事に推薦）

川柳塔社常任理事会（2月4日）
薫風氏と牧人氏の二賞選考委員、牧人氏の常任理事も満場一致で決まる。
どこの柳社でも同じだろうが物価の高騰をいかにして読者に負担をかけぬようにするか、が論議された。
ハワイ土産の写真数百枚は岳人作品だが、ご苦労さまでした。三月句会は主幹ご夫妻の「生々楽天」刊行記念になる。
出席＝多久志・静馬・栞・薫風・生々庵・古方・形水・小松園・一三夫諸氏。

四月新学期
会員募集
毎週水曜日・月四回
夜6時30分～8時30分
六カ月で初等科修了
大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内
関西奇術教室
TEL (271) 七一二八

白酒

竹中綾女選

雛段の白酒いつしかえつて行き　のぼる
白酒の香に雛人形笑みかける　軒太楼
白酒に身振り大きく酔う晴れ着　仙人
白酒も草餅もあり娘沢山　茶人
ひな壇へ白酒が来て型になり　甫久路
白酒が売れず得意へ拝み売り　柳五郎
雪洞の灯で白酒は飲むべかり　一風
白酒を飲ませとせがむ幼稚園　伶人
白酒の飲み過ぎ親をあわてさせ　松花
味が出る頃に白酒底をつき　登美也
白酒で節句を祝う子が居らず　道子
白酒の甘さにつられ下戸は酔い　正則
流石下戸白酒恐る恐る飲み　バット
お白酒ならばと下戸も手をのばし　本蔭棒
もう一杯白酒だからと下戸に酌む　落猿
甘党の僕白酒が口に合い　悠泉
口ざわり良い白酒に騙される　芳子
焼酎の口には合わぬ白い酒　右近
白酒の値段も雛へ申し上げ　肖二
白酒に親が酔ってる雛祭り　好一
白酒の席で母さん歌わされ　洋々
白酒に頬染めてよし雛まつり　福水
手術無事白酒祝いたいなあと思い　季賛
白酒を酌んで女の城にする　昌道
白酒があります札が風にゆれ　七面山
白酒に酔うたか母の軽い口　国彦
白酒を母は上気の顔で酌ぎ　千翁
白酒に女の館姦しい　秀峰
白酒に酔うて明るい部屋となる　与史
倖の日の白酒を買うてくる　与史
白酒に内裏が笑うほどに酔い　どんたく
白酒に思い出があり雛かざる　不二
白酒に酔うたは生きたお雛様　近江
白酒が今宵母娘の仲を持ち　紫宏
白酒に亡き児のげんまん浮いてくる　踏草
酌ぎこぼす白酒舐めた兄なりき　伊津志
雛の値に触れず白酒飲み干され　代仕男
盛装へ白酒のしみつけて去に　里風
白酒の味を覚えた孫と酌む　芳子
白酒のそんな暮らしと遠くいる　重人
白酒の部屋から男追い出され　宵明
白酒を酌ぐ子に大人指図され　久亭
まわらない舌で白酒すすめられ　与根一
白酒にだまされ酔いが廻つて来　祥月
下手な字で白酒あります紙をはり　一郎
下戸だってのめると白酒酌ぎ足され　洋々
白酒をパパへはなみなみ酌いでやり　芳仙
白酒の味のまろさを持つ女　白水
白酒で雛は今年の年を取り　藤持

地　天　軸

白酒が無いので酔えぬ内裏雛

耳

仲どんたく選

補聴器の耳が確かな指示をする　軒太楼
妻の愚痴きこえぬ耳をもち合わせ　仙人
中年の絲を侮る針の耳　宵明
イアリング恋のリズムの風に揺れ　茶人
背を向けて女距離をはかる耳　柳五郎
年寄りの聞こえる耳をいやがられ　道子
大臣の答弁耳打ちされて立ち　松花
パパと子の耳糞を掘るママの膝　国彦
スナックで小耳にはさむ黒い霧　一郎
兎耳集めて売れる週刊誌　バット
耳の長い男の特種ニュース聞く　七面山
雪が降る詩人の耳はほっとかず　魚山
苦労人ある夜は遠い耳となり　福永
ほんとうは耳を立ててるとぼけ顔　千翁
聞き流す耳で大きな腹を持ち　千翁
耳たぶの縁起この子に期待する　秀峰
貸した耳良いことらしい目が笑い　漫柳
日がすけて見える耳たぶ恋つのる　不二
狸寝の耳ささやきも聞いており　近江
妻そつと出来たと耳に口を寄せ　紫宏
耳にタコできていますと孫もまね　天彦
雨だれを捕える耳は哀しいか　善彦
噛われる女の虚栄が耳に揺れ　春日

何にかあるなァとブンヤの耳が立つ　木魚
十二月耳打ちするのが好きな風　道夫
診音の確かさ耳に試歩の朝　洛酔
父の目が聞く耳もたぬ金のこと　代仕男
白い息赤い耳です風の子等　隆子
補聴器を付けた意見にかしこまり　優
くすぐつたいままの耳です子の内緒　里風
おねだりと知つてて孫へ耳を貸し　与根一
耳よりな話買物籠に詰め　落猿
耳元で耐えよと母の声がする　芳子
河豚鍋の外に耳打つ風の音　豊生
口閉じて耳をふさいでいて平和　祥月
片言も理解して聞く母の耳　右近
耳よりなおはなしパーマからもどり　岩光
春を呼ぶ心耳に通う芽木の呼吸　照沖
耳みんな集めて指と目で話し　芳仙
きき耳を立て出番を待つお酒　翁童
耳打ちへ左遷が決まる勘にふれ　昌道
耳飾り心と共に揺れている　綾女
長寿村勝手つんぼが多すぎる　肖二
盲人の耳は一途なもの思い　いわを

佳

三度目は怒鳴られている遠い耳　本蔭棒
聞こえなんだ耳も一しょに笑つとく　可住
聞き流すことにも馴れて年想う　芳子
耳立てて兎は夢を追いつづけ　いわを

人

倖せは泪過する耳を持ち合わせ　白水

地

仏像の耳に母親住んでいる　度

天

母さんの耳へ内緒が背伸びする　洛酔

軸

耳に孔あける勇気を女持ち

電　気

福田丁路選

停電に文化のギャップ知らされる　軒太楼
木挽唄消してしまった電気鋸　登美也
当然のように電気がある暮し　道子
電気消し遅い帰宅にすねてみる　道子
オール電化させて値上げの電気代　伶人
目に見えぬ電気の力恐ろしい　福水
薄暗い電気にしても尚赤字　秀峰
島の灯が微笑み交す電化の日　白水
電気切るようには行かぬくされ縁　漫柳
うなだれて電気もつけぬもの思い　貞祐
電気釜おこげないのが玉に疵　紘
家事全部電気にさせている昼寝　不二
目に見えぬ電気が人を支配する　与史
発電に自然を壊すダム工事　春日
ゲイラブーム関電さんを手こずらせ　踏草
電気まだつかぬ孤島の蕎麦の花　里風
ストをせぬ電気嬉しくニュース聞く　可住
停電の長さへ冬の室凍てる　芳子
将門も浮び出されている電波　右近
電卓で宿題を解く現代っ子　芳仙

賛否両論の中で原子の灯が点り　洋々
幻のような電気の世話になり　天彦
電気屋がかかれば素直なテレビです　重人
鉛筆を電気で削る面白さ　バット
見おろせば電気が描く夜の絵巻　どんたく
エレキギターに陶酔単位とりそこね　素身郎
共鳴が出来ぬ議論でスイッチ切る　のぼる

佳

停電に生活のリズム狂わされ　仙人
スイッチでつく灯明で味気ない宵　明
電線を伝う言葉がもどかしい　昌道
電化した職場機械に使われる　芳子
電気まだ届かぬ過疎にある温み　豊生

人

電気鋸年期のいらぬ音を出し　重人

地

D51もあわれ電気にうっちゃられ　里風

天

漏電の惨事文化に甘え過ぎ　軒太楼

軸

皺塗り潰しネオン輝く夜の蝶

今村夕路句集「梨の花」　定価八百円
句集・句碑建立記念川柳大会が3月7日午前10時から、島根県東伯郡赤碕町農業管理センター二階で開催。（赤碕駅東二百メートル）兼題―駅前・趣味・石・海・長寿・信念―席題二題（各二句）会費二千円（昼食・懇親会費共）句碑除幕式12時30分赤碕駅頭にて。赤碕川柳会。

初歩教室

題 ―「休」―

本田恵二朗

川柳は反骨精神であるという一つの主張がある。反骨精神大いに結構であり、またそうあるべきではあるが、生涯を反骨精神一辺倒で押し通すことは中々出来るものではない。出来たとするとそれは偉大であり、稀少価値でもあると私は思う。人生体験を社会体験を年輪の中に折り込みながら歩き続けているうちに心の角がまろやかになって来て、温い味が生れて来る。ほのぼのとした人間味がただよって来る。そうなると反骨精神一辺倒のあけくれでは心がいささか疲れるようになる。私はそれでよいのだと思う。そして温い愛情の句が生れてくるようになり、人間味豊かな句が生れるようなつてくるなら川柳することによって人間形成がなされたことになる。味のある句を生もう、味のある作家になれ。

メンストリート鎧戸おろし日曜日　喜美代

ただ説明をしただけのものとなった。なんの感動も共感も呼ばない。句は説明ではなく描写であることを銘記せねばならない。この句の場合メンストリートをあたかも人間であるが如く描写してみるなら句が生きてくる。

（メンストリート静かに眠る日曜日）

老人は散歩も休み休みにて　つた

（老人の散歩また休みまた休み）

休講に舌打ちしつつ嬉しそう　同

連休の医師と出会ったパチンコ屋　紘

（休診日の先生と出会うたパチンコ屋）

休みたいと思う日もある冬の朝　正則

（休みたい日もあり凍る朝の靴）

ほどほどに休養をとる老いの知恵　同

（小休止うまくみつけた老いの知恵）

週休二日寒鮒へ予定組む　三十四

休暇たのむ電話に咳も入れ　同

休み休み云うのも古い抗議法　伊津志

（休み休み云うのも抗議の一手です）

休む間に庭師枝ぶり決めている　同

（よく出来た。この調子だ）

親と子が凧上げる幸冬休み　功

（冬休みの親子へ凧の糸が伸び）

三ヵ日スモッグ消えた都市の貌　同

（スモッグも一と休みする三ヵ日）

大臣へマスコミ休みもつけまわし　柳五郎

（大臣の休みへ記者は遠慮せず）

休日が長いと思う空財布　道夫

（休日があり過ぎるよと財布言う）

秒針は休みたくない訳があり　同

腹が立つものに役所の昼休み　慶彦

たまさかの休みを妻にあてにされ　同

ストーブへ連休呆けの顔が寄り　同

兄の不幸休日にあてはまり　静子

（休診日に急に盲腸怒り出し）

一休の奇行は人の世の機微訓え　瓢太

（一休の奇行に訓えられるもの）

休みぐせがついて敷居高うなり　同

目覚しのいらぬ休みに早く覚め　貞祐

休日はゴロ寝と決めた低金利　同

国鉄マンストとは別に休暇とり　同

休戦をしてライバルへ見舞する　無名

（ライバルを見舞う休戦の顔作る）

はげしさの名残りを抱いて休火山　同

急登に風を入れての小休止　忠吾良

（五十坂風を入れよう小休止）

男子寮週休二日へ間が持てず　同

一と休みせよとばかりに左遷され　健二

人生のマラソン休む暇がない　同

赤旗も連休もない暮し向き　昭治

（赤旗も連休もない鍬を振る）

金一封（本社発展費として）

故井上湧三氏未亡人

井上綾子

金一封（同）

川柳塔ささやま支部

平野百合子

目覚しに休みの朝を起される　度
（休日の目覚し正直に鳴り響き）
気休めとは知りつつ慰めの言葉聞く　保夫
（気休めの言葉聞いてる無表情）
散歩道動かぬ椅子で小休止　日々子
針休め庭の小雀よく太り　同
（針休め庭の雀と笑み交す）
若夫婦鬼のいぬ間に骨休め　利美
ずる休みの電話と知らずお大事に　同
日曜も休めぬ人へむごいスト　同
休むこと知って人生長うなり　漫柳
（休むこと見つけて人生長うなり）
田の畔に休んで一服煙管の味　藤持
（鍬の汗休める一服喫いつける）
休むこと知らぬ振子の素直なり　サヨ
（休むこと知らぬ振子のあわれとも）

休みぼけ私の中でつながらず　頼次
（連休ぼけ私と私がつながらず）
公務員暦の赤字を先ず数え　落猿
連休も半どんもない山仕事　同
休診の医者も人なり風邪を引き　岳麓
（本日休診医者とて流感容赦せず）
テレビにもあきてゴロ寝の雨連休　同
連休のプランへ天気が味方せず　幸
一と休みしたい日もあり置時計　同
休まれず流れ作業へ機械なり　道子
（休まれぬ流れ作業の機械です）
休日もパパは大工が待っている　同
（休日のパパは大工に早替り）
休日に朱印を入れる良いプラン　同
休日の朝寝しあわせ刻千金　静枝
（休日の朝寝千金の価する）

子は流感親は不況に休まされ　同
齢半ば転機の心休まらず　大成
（五十坂転機のハンドル休めない）
新暦まず連休を確かめる　同
連休明けネジがゆるんだ顔で来る　寿子
気休めが心の余白につもる朝　同
この辺で休んで登ろうマイペース　静泉
（この辺で休んで登ろう五十坂）
食う方も週休二日にして欲しい　同
休日のゴロ寝を妻に叩かれる　同

題―内―三月二十日締切（五月号発表）
宛先　倉敷市下津井一―九―三四・〒711
本田恵二朗

（羽田国際空港待合室前にて）左から八木摩天郎・若本多久志・橘高薫風・西尾葉諸氏。

日米交歓川柳大会に参加して

▼初対面の方々ばかりでしたのに親しくお導きいただきありがとうございました
（川柳塔篠山支部　平野百合子）

・このたびの日米交歓川柳大会に参加できましたことをよろこんでおります。川柳塔社、そしてハワイウイロー吟社のみなさま、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。
（番傘川柳本社・森中恵美子・〒564・摂津市千里丘3―1―11）

（川柳天主閣・米沢俊夫・〒559・大阪市住之江区粉浜1―8―5）

第二百九十六回（五十一年度第二回）

大萬川柳

「倖せ」入選発表

選者　川村好郎
投句総数　六百二十五句
入選　八十一句

手を出せばとどく倖せつい忘れ　東大阪　美子
倖せにきつとなります角かくし　松江　晃男
倖せは苦労の鉢でひらく花　大阪　頂留子
雑草も春の倖せ待つ寒波　和歌山　久子
倖せな余生に嫁がほめられる　笠岡　古庵
倖せを信じて登るきつい坂　神戸　牧人
善人の倖せ神を疑わず　大阪　儀一
倖せとは何だろ本来無一物　守口　瓢太
働ける倖せ朝の霜を踏む　東大阪　清人
子にバトン渡して自適の老夫婦　宝塚　静馬
倖せは貸し借りのない寝正月　倉吉　弘朗
倖せを演出してる微笑かも　倉敷　克枝
倖せを金で買えるという若さ　今治　有里
一日の倖せ呼んでくるセット　兵庫　可住
そと面がよいので倖せかと思い　倉敷　筒子
お倖せですかへ間延びした返事　呉　甦光
倖せと自問自答をする鏡　今治　宵明
倖せな姑文楽へ泣きに行く　大阪　柳志
倖せの中で自分を見失い　大阪　柳宏子
倖せを呼ぶキーそこらに落ちてない　大田　畔太楼
倖せの女神は心の中に居た　鳥取　秋女
倖せのためと別れの理由つけ　今治　純平
倖せを死にそこのうてから見つけ　和歌山　武雄
倖せに生きる十字架とも思う　富田林　花梢
倖せは子の食欲に追いつけず　倉敷　素身郎
倖せを知ってる白紙の保険証　倉敷　健二
この辺を倖せと悟り生きている　八戸　昭治
あくせくと貢ぐ学資へ満ち足りる　今治　昌道
倖せな影へ月も尾行する　堺　千万子
見せかけの倖せダイヤの無駄光り　大阪　蘭
倖せを呼び込んでいる福寿草　尾鷲　伊津志
足るを知る倖せ除夜の灯に和む　唐津　照沖
これしきの苦労倖せ逃すまい　平田　代仕男
倖せに慣れる心に鞭を当て　倉敷　白水
エプロンの白さ倖せこぼれそう　奈良　本蔭棒
世間から見る倖せは地位できめ　鳥取　鐘堂
市場かご満たし倖せだと思う　倉敷　圭子
空気にも似た倖せの妻といる　堺　憲祐
愛あらば倖せなどと言うとれず　神戸　静泉
清貧の無病倖せかもしれず　堺　憲祐
倖せな職場隔てのない和み　和歌山　富子
どの窓も倖せらしく団地の灯　堺　憲祐
倖せになれる聖書に眠くなり　八尾　鬼遊
倖せは坂で後押す妻がいる　堺　憲祐
倖せを逃さぬ母の手が荒れる　堺　憲祐

川柳塔社同人の
胸に
かがやくシンボル・マーク

女性作家のもあります
一個千百円（送料共）

倖せと信じてやろう娘の便り
装いを解けば倖せとは遠く　寝屋川　小路

倖せがおそろしくもなる過去をもち
倖せと背中合せに愚痴をもち　西宮　百酒

倖せの彩を子供が染めてくれ
倖せと思えば倖せの暮しなり　大阪　道子

易の灯で安い倖せ買って去に
倖せと思い直して妻と飲む　今治　琲珈里

実家へ出す便り倖せと書いておき
倖せにしますと誓ってくれただけ　西宮　多久志

倖せと書くペン先がゆがみだし
それなりの倖せ摑んだ太い指　富田林　美代

倖せ一杯写して帰るハネムーン
倖せがもれるわが家の高笑い　倉敷　里風

他所目ほど倖せでない玉のこし
仏にはすまぬが倖せかも知れず　尼崎　利美

下積みの倖せあぐらの四畳半
倖せが見え隠れする長い坂　八尾　美幸

倖せは疲れハネムーン持ち帰り
倖せの尺度親子でくい違い　鳥取　洋々

金積んだ倖せらしいくずれよう
つまずいてから倖せの価値を知り
倖せと別に女は金を貯め　貝塚　つき子

倖せだと思う阿呆になっている
他人の世話出来る倖せ抱いている
倖せの中で疑問がつきまとう　大阪　君子

佳句

倖せへ最短距離にいる無欲　堺　天笑

倖せが続く警報器が鳴っている　寝屋川　度

飼犬の倖せ鎖につながれる　今治　宵明

与えられる倖せもあり施設の灯　大阪　道子

倖せは終着駅に灯がともり　東大阪　白風

倖せを先取りローンまだつづき　堺　一二三

倖せへおんなひとりの石を積む　堺　ひろ子

人ノ句

倖せと云った言葉の裏を見た　大阪　蘭

地ノ句

天秤へかける女と妻の幸　富田林　維久子

天ノ句

倖せは自分の顔で生きる日々　鳥取　露杖

選者吟

倖せは過去の苦労が笑い合え

昭和五十一年度ベストテン（二月現在）

一	**多久志**	五、五	西宮
二	**百酒**	五、五	西宮
三	**牧人**	五、五	神戸
四	**美幸**	五、〇	八尾
五	**幸**	五、〇	和歌山
六	**蘭**	四、五	大阪
七	**利美**	四、〇	尼崎
八	**花梢**	四、〇	富田林
九	**露杖**	四、〇	鳥取
一〇	**ひろ子**	三、五	堺
一一	道子	三、五	大阪
一二	天笑	三、五	堺
一三	洋々	三、〇	鳥取
一四	里風	三、〇	倉敷
一五	筒子	三、〇	倉敷
一六	小路	三、〇	寝屋川
一七	憲祐	三、〇	堺
一八	静馬	三、〇	宝塚
一九	維久子	三、〇	富田林
二〇	君子	三、〇	大阪
二一	道夫	三、〇	和歌山
二二	つき子	三、〇	貝塚
二三	美子	三、〇	東大阪
二四	静泉	三、〇	神戸

以下略

昭和五十一年度第四回

「枝」五句以内

締切　三月二十五日

第五回

「ふんぎり」五句以内

締切　四月二十五日

投句先

〒593堺市堀上緑町一―三―七

藤井一二三方　**大萬川柳係**

昭和51年版『川柳年鑑』　A5　一八〇〇円　送料　二〇〇円

古川柳と現代川柳の関係、現代川柳の問題点、現代川柳界の分析を通して川柳の本来について展望する座談会特集ほか、評論、作品評、柳界現況、日本川柳会の発足について、古川柳研究グループの活動など。

東京都千代田区富士見二―六　雄山閣出版

（振替口座　東京三―一六八五番）

右から—バロン後藤博士・若本多久志団長・富樫主席領事

久志副理事長）小川佐知子さん（和歌山市）の『傷深く残し他人の顔でいる』が第一位。第二位以下は川上大輪、深日白光子、岩本雀踊子、川上富子の諸氏。

▼台信跡郎句集が〒862熊本市京塚本町五三—一二七谷虹桟橋方川柳噴煙吟社から発行。氏は噴煙創始者の一人。—子に歩巾合わせて春の日が長い—センスの利いた好句集（五百円送料共）

▼第21回全国川柳作家年鑑公募。参加用紙に姓雅号など従前通り。参加費は一五〇〇円。締切は4月30日厳守。七月下旬発行予定。投稿は〒666—0101川西市向陽台三—七—八一橋本言也あて。なお参加用紙ご入用の方は〒653神戸市長田区五位ノ池町一—三—一ふあうすと川柳社。

▼風（季刊8）河野春三氏のペンで—鷺第一集の紹介—がある。これは高鷲亜鈍氏が春三氏に送ったものだそうである。いつもながらの小気味よい編集が印象的である。発行所〒569高槻市竹の内町二二…一河野方「風」発行所。

▼縄（季刊2）宮田あきら氏編集の現代川柳研究誌である。一部四百円（〒共）発行所は〒601京都市南区東九条西河辺町三〇。

▼市岡暁舟氏（ハワイ）から—日米交歓川柳大会はホノルル市内はもとより州全体に渉って川柳の意義を高揚しました。ホノルルの名士を来賓に迎え川柳搭らしいアイデアを織りこんだものでした。

▼高鷲亜鈍氏（寝屋川市）一月五日付の備水新聞に『元旦・素朴に生きる』を執筆。路郎先生の「元旦だせめて眼鏡をふきましょう」や葭乃先生の「福寿草松に従いそろかしこ」と共に両先生のある日の姿を紹介された。

▼日川協コーナー▲50年度総会の出席者は79名（会場かんぼーる京都）開会挨拶は福永清造、司会は大井正夫、創立総会以後の経過と会計報告は堀口塊人、議案審議は（理事長）片山雲雀、閉会挨拶は平賀紅寿諸氏。その後の加盟柳社は15社。（詳細は通信第五号に）

▼同人の動向▲坂形水諸氏が、生駒の麻生葭乃先生へハワイからのみやげ物などを届けに行かれますますのお元気を共によろこばれた。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼生々庵・小石主幹ご夫妻は〝生々楽天〟の完成により一段とまたご多忙である句画展あり、祝福の会があり、他柳社への招待選などそのうえ医師会の要職等々周囲の者もハラハラするばかりである。

▼いずも川柳賞—50年度—は石倉芙佐子（出雲市）の『煩悩の瞳に聖書は冷えた文字』が選ばれ表彰された。佳句は飯塚虎秋氏、松本文子さん、藤井明朗氏、堀江芳子さん、尼緑之助氏

▼川柳ささやまの50年度最優秀賞（各月の天の天位賞の中の最優秀句『急報を待ち兼ねている達磨の目』平野百合子さん作。50年度丹波柳壇賞は『進むとき切れる鋏は退かず』高橋近江さんが獲得。

▼川柳わかやまの50年度英水賞決定。（選句は若本多

菜の花・富柳会合同・観梅日帰り句会

日時 **三月十四日**（日）**上六発8時40分。**
八木発9時16分の近鉄宇治山田行特急に乗車—乗車券は鈴鹿市まで、特急券は中川まで各自で買う。場所は鈴鹿市「魚半楼」0593—82—2036。近鉄半田駅下車スグ。

会費 三、五〇〇円（観梅飲食代含む）交通費は各人自弁。

兼題 梅—都—支える—（2句・席題なし）

申込締切 **3月8日**—鬼遊まで。富柳会は岳人まで。

（菜の花句会3月中止）

▼宮口笛生氏（奈良市）はこのたび国鉄川柳人連盟発行の雑詠『山脈集』の選者を二年間担当されることになった。

▲橋高薫風氏から―白百合川柳社（白百合川柳会が10周年を期して白百合川柳社と発展改称）主催の岡山県川柳大会に生々庵主幹と共に選者として出席されたが大会前夜、榎本聡夢三氏が嘉数千代香さん宅で歓待を受けられた。なお一月十八日のこの大会出席者は一三四名の盛会で、投句も四五名。水粉千翁氏（倉敷市）が総合七位を獲得された。

▼岸南柳氏（大阪市）は20日あまり入院されたが1月30日に退院された。

▼若柳潮花氏（高槻市）は目の手術をされることになったが、これで六回目だそうで、頑張ってください。

▼不二田一三夫氏編集の、「秋田実主宰〝漫才〟（季刊）」が三月中旬に復刊第一号を出す。（報知新聞1月25日付朝刊から）

▼北川春巣氏を悼む▲

▼浜田久米雄氏（岡山市）から―追悼句会に出席できず、令息の方へ私と吉永川柳社からお供えだけしました。

▼山根白星氏（東京都）から―二月号での春巣先生の訃報を知り呆然自失。昭和28年当時、博多に在住していた私に九州大学の医学会に出席中の氏から架電、一晩料亭で川柳よもやまばなしの花を咲かせたことがありました。その後、上京の折には再会の約束の書状もいただきながら遂に叶わぬことになりました、嗚呼・合掌。

▼福田丁路氏（高槻市）から―春巣・湧三・古心三氏がご逝去。謹んで哀悼の意を表します。

▼旅信▲

▼西尾栞氏から日米交歓川柳大会のハワイ通信拝受。

▼橋高薫風氏からは同寄せ書拝受。楽しそうな雅号が躍如としている。

▼各地の句会▲

▼堺川柳会は3月12日6時から八木摩天郎宅で開催―題は―逆・気分・仲人。

▼南海川柳会は3月18日6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は―道しるべ・突当り・なし崩し。

▼南大阪川柳会は3月20日6時から―大万で開催。題―峠・偽り・悪夢・さわやか。

▼東大阪川柳会は3月27日6時から―東大阪市中央公民館二階第二集会室で開催題は―咲く・愛・命・スレスレ。

▼風来子句碑除幕並びに記念川柳大会は4月25日（前号参照）

▼番傘わかくさ川柳会30周年記念川柳大会―同人・会員・誌友合同句集「草の塔」刊行が5月16日11時から大阪市立生野区民センターで開催。宿題―三十・大勢・若さ・交際・兄弟・旅舞台・嬉しい・笛は西尾栞氏選・愛（各題2句以内、1時30分出句締切。欠席投句はご遠慮願いますと。会費二千円（昼食、句集・同誌5・6月号呈）懇親宴は大会終了後、参加費二五〇〇円。4月30日までに申込みのこと。主催番傘わかくさ川柳会。

▼俳句公論二月号は川柳女流作家特集。川柳塔同人から倉敷市の小野克枝さんと島根県の堀江芳子さんの佳吟10が紹介された。

吉永川柳社創立30周年記念大会

日時　五月九日（日）十一時

会場　吉永町中央公民館

兼題　「小銭」　川村好郎選
「疑う」　大森風来子選
「胸」　本田恵二朗選
「紅（べに）」　直原七面山選
「一筋」　浜田久米雄選

席題　二題（当日発表）各題二句

会費　総合得点10位まで呈賞
五百円―昼食代別
記念品出席者全員に呈上

投句　二百円（50円切四枚）3㎝、18㎝の句箋、裏面に雅号明記、4月30日までに〒702 9―02岡山県和気郡吉永町吉永中・横山一声あて（発表誌呈す）

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

・水煙抄・

秀句鑑賞

——前月号から——

山本素郎

正直に木の葉は天に和して落ち　渡辺伊津志

不二の法門、即ち、真理とはどんなものであるかを維摩居士が文珠菩薩に質問した。『不二の法門は、私どもの言葉では説くことも語ることもできません。真理は一切の我々の言葉を超越しています』と答え、こんどは文珠が維摩に反問した。『不二の法門とは何ぞや?』

が、維摩は黙して答えなかった。この黙然無言を文珠は歎称したという。極りない宇宙の大運行の中にあって、天に和したか地に和すか、作者は、一片の落葉にそれを観じた。君見給え**波**蕤草が伸びている（路郎師）にも一脈通じるものを覚える。

花道をすぎたらレール敷いてない　安田　紘

この花道は、有終の美を飾らせたい周囲の同情によって設えられたものかアンコールはない。従って、その後のポストも引く手あまたとはいかない。散る桜散らぬ桜は淋しかろ（日車）と併せて人生の哀歓を深くする。

新幹線直ぐ来れますと娘を取られ　古野伶人

とは言うものの、嫁った娘をそう簡単に来させてもくれまいし、また、そう望んではならないのも親である。口では『もらってくれる人がありまして』とは言うものの、肚の底では娘を奪られたとしか思わないのも親心。

染めてると言わずお若いことを褒め　真山国彦

否、舶来のルー十三番という染髪料で染めていることを、チャンと知ってる上でのホメ言葉だから油断がならない。

妻でぬぎ日の出と共に母を着る　岩田三和

この、あざやかな変容は吉祥天の化身かもしれない。単に、良妻賢母と片附けられない神々しさだ。ウチにも、ひとりおわします。

突き当る相手も下を向いていた　有働芳仙

ソクラテスが、アテネの十字街頭で真っ昼間から洋灯をつけて探しものをしていた。『先生、何を探しているんですか』『人を探しているのじゃ』『人って、そこら中、沢山の人通りですが』『ありゃ、皆人じゃない』

—人多き人の中にも人ぞなき—別に考えごとがあるわけでもないが、無心に突き当たった相手が、こんな哲人だったらバンザイだ。

地下街を出ることは出た田舎者　原田篤史

梅田、堂島、虹の街。大阪に住んでいてさえ穴から首を出してキョトンとすることが多い僕は、さしむき都会の田舎者である。然し夜ともなると目的地がハッキリしてくるのが不思議である。

日向ぼこ孤高の父は耳遠し　井上のぼる

ある域に達すると、頷くか首を振るだけで用が足りるものだそうな。ウツラウツラと陽を浴びながら神と語ろう大悟の姿。それを、世間は恍惚の人と言う。この明きメクラめ。

ネックレスはずして主婦の座にもどる　納忠葉

騙されてあげる笑顔が美しい　川上富子

迷い犬覗いて交番誰も居ず　桑原道夫

死の暗示看護婦までも無言なり　大林曲ん手

こんなにも女の指は反るダイヤ　芝原路春

本社二月句会

北川春巣追悼の夕

会場　金属会館
六日　午後六時

新会場は名ほど堅くなくソフトムードが一つぱい、明かるくて感じがよい。

生々庵主幹の柳話は故春巣医博の幼少時代からはじまり、学生、医博への秀才コースをつぶさに語られた。川柳医家が川柳医家を語られるので、病気と闘われたくだりになると流石に専門家としての〝心〟に会場がシーンとなる。（故春巣氏のご長男睦彦氏がその前に主幹に招かれ、あいさつをされた。そして故春巣氏が日記帳に残した最後の句を披露された。下段参照）

川柳文学主幹の堀口塊人氏も駈けつけてくださった。（弔電を浜田久米雄氏と吉永川柳社からいただく）ありがとうございました。

新会場初の月間賞杯は高杉鬼遊氏の佳句にかがやいた。

―進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊。

出席…与呂志・一三夫・太茂津・与史・道夫・武雄・千寿子・としよ・葛城・滋雀・静歩・蘭・正彰・天笑・美房・勝晴・静馬・百酒・古方・水客・凡九郎・喜美子・喜風・瓢太・肖二・綾女・塊人・紫香・花梢・維久子・敏・夕花・漫柳・柳宏子・鶴声・満津子・喜代子・右近・万的・睦彦・度・誓二・蘇堂・千万子・寿美子・美幸・多久志・柳志・酔升・牧人・博也・一也・川狂子・一二三・好郎・三十四・恒明・栞・古啓・いわを・弘生・生々庵・鎮彦・幸太郎・笛生・恵美子・六竜子・鬼遊・千梢・君子・あいき・岳人・儀一・雀踊子・小松園・吸江・〆女・庸佑・薫風・弥生・頂留子・酔々・重人・葉子。

席題「医」　黒川　紫香選

女医さんが女に戻る休診日　牧人
偽医者とわかりあとから青くなり　酔升
医者も人間寿命には勝てず　肖二
医科めざす受験生の灯まだ消えず　庸佑
医者の妻居留守の役も板につき　一二三
聴診器もてば舞台は医者に見え　柳志
小児科医母親ばかり叱ってる　太茂津
ここからは神に任せる白衣脱ぐ　天笑
無医村を素足で走る春がくる　古啓
黒鞄持てば御医者と間違われ　葛城
納税に頭が痛い流行医　一三夫
銭勘定出来んが名医ようはやり　一舟
獣医の手を心配そうに子供の眼　万的
名医として最後は神の声をきく　維久子
放送は医師を求めている列車　塊人
迷信にこって医者にはかからない　肖二
信じ切る医者にハワイのみやげ持ち　千寿子
無雑作に医者の権利で処女へ触れ　一二三
医は仁でなくなってきて医者が増え　喜代子
ポックリ寺話題に診察の順を待ち　漫柳
医者の愚痴聞けば成程なと思い　儀一
笑い声絶えぬ一家で医者知らず　静馬
三人の医者それぞれのカルテ書く　静歩
手おくれになって慌てる医者嫌い　牧人
看護婦を連れて医長のご回診　肖二
歯科すんでこんどは内科の部屋で待ち　庸佑
算術で荒稼ぎする医者もおり　瓢太
足どりが軽い産科医の門を出る　重人
寝たきりへ医者型どおり脈をとり　万的
無医村の雪の深さへ立ってみる　水客
医者として語る言葉に嘘が無い　与呂志
お守りのような老医の聴診器　道夫
お医者さんやろと女の鼻が当て　弘生
診察の順序は籤医も同じこと　好郎
ご無沙汰を医者にお詫びできる幸　武雄
癒ったら医者のことなどすぐ忘れ　柳宏子
病みあがり医者ほどくすり知っており　酔升
医者の死に患者の方があわてたり　弘生
セックスの話さらりと婦人科医　多久志
道狭く角の外科医のよくはやり　千寿子
産室へ医師は笑顔で回るだけ　千万子
手術まですすめて呉れた医者が逝き　滋雀
かけつけた医者に家中ほっとする　敏

故北川春巣氏最後の日記帳から

昭和五十年十一月十一日（火曜日）

病床は月月火水木金金
薬石の効　何ぞ現れ方おそし
見回せばみんなお世話になった顔

外科医の嘘にすがる外なく身構える　水客
まっ先に看てくれる医者一人居り　度人
門灯に医と書いたまま村に住み　塊人
雑談へ医者も解けこむ程直り　紫香

席題「宝」　堀口塊人選

健康という宝石を忘れてた　千寿子
何れ空くじ発表迄は宝くじ度　柳信
説明がよすぎて宝物疑われ万的　芳子
五ツ子を宝のようにみな騒ぎ　笛生
下積みの頃の日記を宝とし　多久志
国宝と言う替玉を拝まされ　滋雀
宝物掘り当てそうに犬を連れ度　寿美子
国宝の仏像御利益うすそうな　牧人
信用を宝に守る古のれん　あいき
夢が持ちたくて宝くじ買ってみる　一舟
健康が宝と思ううまいめし　柳志
新聞に出て知らされた宝物　百酒
思いやりの心を宝として生きる　喜風
家宝だけ残すに苦労する不況　敏
七福神坐るとこなく宝船　多久志
子の宝そっとのぞけばしかられる　酒
宝石を買えば着物も欲しくなり　岳人
名宝と言われ仁王は笑わない　牧人
二男二女ほかに宝のない夫婦　美房
子宝というて育ててそむかれる　一三夫
正直な人が列んで宝くじ　与史
買えないと思う宝石よく光り　肖二
宝石の光り女の妬心かも　花梢
人間国宝しいたげられた過去があり　好郎
非常時香という宝　古方
子宝の代りの金が貯まらない　与史
わが家の宝はやっと歩き初め　美房
がらくたに鍵かけ子供の宝物　道夫
億という数字へ宝石光ってる

国宝を見せてもらえる列に立ち　雀踊子
宝物殿心貧しき値踏みする　太茂津
国宝でなかった頃も観世音　塊人

兼題「巣」　川口弘生選

遊ぶだけ遊んで古巣へ帰ってき　清女
巣造りにつばめが迷う色がわら　登美也
蜂の巣を叩き落した冬の怪径　柳信
巣ごもりのようにばあちゃん孫抱いて　芳子
子等巣立ち二人だけの城となる　祥月
病気に効くと言われて巣でも飲み　正朗
焼け野原矢張り古巣に家を建て　一栄
訪れを待つ心あり巣箱出す　幸
曲線を描いて巣作り軒に消え　洛酔
白蟻の巣国宝へ遠慮せず　季賛
千年も生きよと鶴は巣籠れり　摩天郎
日布交歓会で古巣知らされる　千寿子
外国の旅でそろそろ帰巣性　百酒
小さな小さな巣箱に帰える定期券　雀踊子
愛鳥の巣箱作りに小さい釘　一三夫
元の巣に戻る情の茶が熱い　滋雀
我が古巣八十の母の暖かさ　千寿子
古巣に帰るすこし翼を強くして　夕花
母招く古巣に嘘はないだろう　維久子
途中下車してから古巣の良さを知り　寿子
負け犬となって古巣の暖かし　幸生
ふる里に古巣のこしているゆとり　武雄
巣立つ子へ親の涙が仇となり　儀一
巣立ちする朝で大きく輪を画き　小松園
当分はかじるスネあり今日巣立つ　六竜子
巣立つ子に別居の話聞かされる　綾女
巣立つ日を待ち惜しむのも母か　好郎
カラスの巣の下に山賊どもの巣　勝晴
ある日ふと不善が心へ巣をつくる　好一
一億の巣へミサイルが向けてあり　一舟

恋を得て親の住む巣に遠ざかり　生々庵
お互いに大変つばめの巣に想う　頂留子
悪の世を叩けば銭の音がする　滋雀
歩どまりの悪い日本で巣ごもれず　一舟
安眠の巣だと思うて墓掃除　武雄
悪の巣に小窓が一つ開いている　水客
ツケのきく巣があり独り酒を酌む　多久志
いつからか蜘蛛が巣を張る思考なり　古啓
愛の巣が実家の親呼ぶ義理で建ち　一二三
病巣を医長がペンで指摘する　博也
巣だつ子に母は小さな石を抱く　夕花
退屈な男が蜂の巣をつつき　牧人
帰巣性信じて午前二時を聞き　多久志
コンパクトあけて少女は巣立ちゆく　酔々
聴診器おいて小鳥の巣をのぞく　恵美子
妻が居る子も居るわたしの小さな巣　美幸
巣の中に鳥の怨の羽根がある　酔々
巣に帰る性を軍歌が背を押す　太茂津
雀の巣黙って聞いてる金のこと　維久子
巣を出ると男の背ナがしゃんとする　恵美子
帰巣性やっぱり家で寝てはった　凡九郎
夕陽あかあかくもが絵になる巣をつくる　万的
巣立ち行く子よ鳩になれ鷹になれ　古啓
蹴落とした昔は言わずホトトギス　弘生

兼題「春」　児島与呂志選

心の窓開けば通う春の風　一好
春の雲ふわりふわりと浮気する　祥月
春よ来い冬の出番も終わるから　洛酔
解けていく夫婦の春の水たまり　寿子
こぼれ種春に素早く衣ぬぐ　登美也
アベックの傘一本にする春の雨　柳信
日溜りへ職にあふれた春を抱く　滋雀
お水取りすんだと老母に春がくる　多久志
春の陽がいっぱい耳かきを探す　恵美子

芽吹く春じっと耐えてる黒い土　敏
冬眠の蛙は春を疑わぬ　美幸
春の陽へ髪のよごれがよく目立ち　花梢
ショーウィンド春だ春だとそそのかし　満津子
春を呼ぶ雀と喧嘩をしてるよう　道夫
早春の丘にポッポッ梅薫る　肖二
春風が吹くと蝮が目を覚ます　酔々
臥す父へ春を知らせる梅を活け　好郎
春を知る芽がそれぞれ天を指す　六竜子
ボート屋の旗新しくゆれて春　塊人
春や春のぞけば蛸のつぼも留守　六竜子
何んとなく春の気配は病んでても　小松園
ささやかな庭にしのびよる春の色　生々庵
水たまり春は出口を探してい　水客
せせらぎはもうすぐ春とのたより也　生々庵
春のパン屋でフランスパンを買う　酔々
巡礼の鈴を鳴らして春がくる　牧人
春日遅々約手逃れた糸を垂れ　滋雀
高原の道一直線に春区切る　万的
恋ふたつみつこぼれそう春匂う　与呂志

兼題「川」　戸田　古方選

橋のない川の向うに青い鳥　一栄
ふる里は明治の川の澄むところ　洛酔
犯人も協力していた川ざらえ　芳子
どぶ川を生かす立て札立ち並び　清女
飛べそうで飛べぬ小川がある故郷　美登也
川幅へいっぺん石を投げて見る　紫香
川底に春のささやき光るもの　生々庵
ドス黒い流れゴミも動いて川らしい　凡九郎
オフエリヤの髪を川波くしけずる　寿美子
木曽川もあるのにセーヌを描きに行き　どんたく
ふるさとの川には民話一つなし　恒明
流れない川が一揆を企だてる　鬼遊
逆上る魚を川は流さない　百酒
豪雨襲来ガ然川が喋り出す　一三夫
バスツアー用足す客は川を向き　一二三
川濁る今日は独りになりたくて　水客
川ざらえ刑事が風邪をひいただけ　千万子
大阪の川に魚がいたニュース　美房
川ごころ乱さず歩く老夫婦　美幸
川筋の情調へ忘れた日本を問うて見る　凡九郎
舞妓はん写らぬ川となりました　維久子
大井川肩で渡れば絵ともなり　どんたく
陽も月も抱かれよ母なる大河なら　古啓
川風に吹かれ長い手紙をかいてます　維久子
海の青信じて逸る谷の水　武雄
登山靴山で素顔の川に逢う　千万子
川黒く塗って子供は警告す　綾女
少年の大志は川をさかのぼる　美幸
川蛇行して嘘を考える　水客
川底で逆らうまいと丸い石　千寿子
流れてはいるのに川も自閉症　古方

兼題「北」　西尾　栞選

北風に吹かれるままの迷い雲　幸
北の海映るニュースへ鮭を焼く　正朗
南から北へ左遷の荷をまとめ　祥月
北極星とヨットの女対話する　どんたく
北風に倉のもろみが生きてくる　登美也
北風が一気に押してくれる橋　芳子
北国に一生かける聴診器　恵美子
北側に雪まだ残る吹き溜り　肖二
北風に試されている寡婦の意地　千寿子
北帰行背中のぬくい日もあって　寿美子
南国の花嫁北の冬に耐え　千万子
航海誌磁石は北を偽わらず　六竜子
北方領土返還に触れず又来ます　幸太郎
女遍歴その過去を北枕　多久志
二DK仕方がないよ北枕　喜美子
北風は陽気に雪とたわむれる　岳人
北風に佇つ吾れへ鞭の音がある　六竜子
北側へ成果挙らぬ課が移り　柳宏子
北育ち棟方好みの顔の彫　一三夫
北風が外人墓地で泣いている　酔々
北を指す磁石今だにお人好し　頂留子
北国の味人情とおつけもの　万的
北側に植えても八ツ手よく育ち　漫柳
さいはてにきて幸福駅という名所　優人
北斗七星真上に虜囚に雲深し　重人
北風に逆らうて行く三次会　天笑
北風をガラリと山の夜霧吸う　蘇堂
車窓からここ北国の天の川　塊人
滅びゆく民とは悲しい北の人　誓二
北国の伝説を聞く囲炉裡端　〆女
北国はまともそれでも二人の手は温い　吸江
北風に向けて地下足袋干してある　岳人
最果てのまだ北がある故郷を持つ　水客
北国の雪を褒めたら叱られた　弘生
Nの字を入れて案内地図が出来　敏
北国のどかに雪よそに日尚ぼこ　静馬
北国の男は北を向いて泣く　道夫
北風に乾く泪もあるのです　古啓
北のかたそのご機嫌をもてあまし　生々庵
北方領土空念仏にしたくなし　恒明
北風に再起の歩巾ふり向かぬ　肖二
雪おんな乗せると北へ行く列車　酔々
北国の白い掟の駅に佇つ　天笑
北を差す磁石のような堅い人　葛城
雪解けを待ち北国の人と添う　恵美子
北ぐにの女は肌で勝負する　一三夫
北風に焼香の列まだつづく　博也
北国は雪の底から機の音　鬼遊
北面の武士にしありし物語　栞

（河井庸佑・整理）

花地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

南大阪川柳会　金井　文秋報

なれっこの遅刻頭をかけば済み　一舟
なれっこの恐さは罪を意識せず　頂留子
職人の手に同んなじの餅ころび　正彰
それがなれっこ勿体ないてどんな事　古方
削られてもともという枠をとり　柳宏子
もうとうに枠をはずしていた二人　好一
野望持つ二男で枠にはめられぬ　肖二
王手飛車かけられている心境さ　恒明
心境をさぐる大きな金が要り　喜風
びっくり仰天大きな口をあけたまま　儀一
嬉しいに決まってる心境聞きに来る　庸佑
心境の変化遺言又変わり　一栄
仕込まれた芸に二代の血が通い　滋雀
仕込まれた強み匍ひ出る気を捨てず　凡九郎
仕込みする杜氏の独り寝つづく秋　綾女
猿は猿仕込まれた芸しか出来ぬ　十止庵
芸仕込む方も忍耐強いられる　弘生
標準と云うのがママの気に入らず　思月
横文字を並べレベルを高く見せ　蘭
徳用に弱い女の無駄づかい　あいき

オーエスケー川柳会　大坂形水報

形式はどっちでもよい彼・私　亜也子
忘年会しっかり遊べと教えられ　洋々
遊びではない目の輝きを信じます　有一
町外れのんびりとバス待たされる　元海
観光バストイレ停車の町外れ　千夢
町外れ絵になりそうな橋があり　一念
ドーナツ化継ぎ目なくなる町外れ　貞彦
マイホーム三ツ乗りかえ町外れ　洋々
幕開けの希望みのらず幕の降り　常夢
痛烈な野次に煙幕張る市長　博泉
長期スト世論におされ幕となる　登
三億円十億使って幕切れか　健坊
幕が降りても役者の顔である　亜成
黒幕の前で刑事が踊ってる　一扇
環境の良い所では遊ばぬ子　みどり
国民はつんぼさじきで幕が開き　栄
ひっそりと引きたく思うぼくの幕　聖地
デザイナーの或る日遊びの鋏持つ　形水
トンネルを抜けたら雪と遊ぶ夢　弥生
ぎこちなく舞妓と遊ぶ時の人　入仙
ドラマなら二人がやっと添えて幕　好郎

川柳後楽　井上柳五郎報

直感に指名手配の運が尽き　胡風
老妻の直感神に近くなり　葵丘
人生のたそがれ直感だけがとがり　照路
ヘルメット脱いで柔和な顔になり　勝
鉄塔へ猿のようなヘルメット　昌吾
ヘルメットトンネル男の無精髭　博友
骨折って憎まれ役となる道化　武士
骨抜きにする鼻声をもつマダム　雷山
骨抜きにされた日本の平和主義　秋月
骨董がコトコトささやくように鳴り　哲郎
惰性では喰えぬ不況に揺れる椅子　洋之
ずるずると未婚の母が出来上り　久米雄
すねる瞳が反抗期の彩うちあける　柳五郎
すねる子をアナウンサーは持て余し　たけ志
派出所の前で女にすねられる　幽谷
拗ねられて拗ねて二人の夜が白み　七面山
世渡りへ善意が力を添えてくれ　佐加恵
中年へ女の好意目がまぶし　熙
行きずりの好意になごむ旅の風　正一

菜の花句会　内海　幸生報

昼の酒通天閣に影がない　岳人
幻の喝采をきく下り坂　鬼遊
人間に還る坂なら登ろうか　静歩
就職の子が消えて行く雪の坂　美幸
昼酒に女の嘘が溶けている　肖二
昼の酒日暮になっていた時計　悦郎
昼酒に口やかましい妻もなく　水京
政治茶屋時効成立の祝いの灯　鶴声
酒豪への供養昼酒から始め　正彰
めでたい酒は昼間でも大つぴら　誓二
屈してはならぬ二浪に冬の坂　牧人
昼酒で大器晩成期す男　酔々
昼に呑む酒に謀反持つ男　雀踊子
坂道で波の自爆を聞いている　紀美代
ゴキブリの性で昼酒のんでいる　幸生
坂のある島の心は人を待つ　文子
昼酒へにげる男を許せない　史葉
祝賀会の隅で飲んでる苦い酒　洋子
昼酒に逃げる男に故郷がない　弥生

祝われて老母小さく酔っている　夕花

川柳わかやま　野村太茂津報

土壇場で日頃の常識うろたえる　幸
六法をかじり常識歪んでる　正博
常識も次第に骨董めいてくる　千寿子
常識が足らんと一喝廻れ右　天彦
常識で割り切られたくないふたり　芳朗
散り急ぐ花が女の足をとめ　祐嘉子
急ぐことないと死神いんでくれ　英子
昨日のこと思い出せないじれったさ　としよ
三十八度線闇の詩あり今日の幸　きみ
思い出に触れた盃宙に浮き　道夫
思い出は運命を変えた日の出会い　寿子
思い出をその折々の小引出し　和子
思い出が滲みたガラクタ捨てきれず　京子
生れ来て数字で人生縛られる　まさ枝
鯊釣りの思い出の川涸れていた　与史
マンションの室の数字に歩がつかれ　元一
お寺さんさすが命日覚えてる　那智子
常識を逸した奴が旨く生き　喜誉司
売り出しの店にスパイの手がのびる　福水
数字から解放される詩つくる　武雄

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

跳躍を忘れた父の定期券　美幸
ふぐの味はジキルとハイド冬の酒　薫風
気にかかる河豚たべて来て黙っとり　いわを
跳ね返る言葉を残してきた別れ　弥生
昔むかし勇気ありけりふぐを食う　鬼遊
同伴を解けば過去が喋り出す　好郎
ふぐのきも食う食通も不安なり　克美
寡婦一人　朝のしじまにパン跳ねる　吸江

金策を暮れのからすにからかわれ　儀一
早や跳ねる自由赤子のおむつかえ　喜風
錦絵の皿とてつさと勘定書　小松園
つららから水滴童子跳ねて春　酔々
いっぱいにふくれたふぐの自己主張　鎮彦
同伴の恋ではなくて寺詣り　太庸
ふぐばかり釣れるのどかな日和なり　史好
小さくても鯛です跳ねた身でやかれ　サヨ

川柳たましま　稲田　豊作報

茶に呼べば庭師鋏の音の中　三辛堂
一矢報いるよりも忘れることにする　克枝
試験官ちょっと笑うて時間切れ　千翁
良心が忘れましたを許さない　誠一
期待する親が居るから固くなる　扇水
傑物になるかも知れぬ受験の子　皷草
忘れろという万策の尽きた悔い　梁水
証拠一つないまま噂野火となり　豊作
飛車角も切って裸の王で待つ　八笑人
モルモットがわりに入院さすつもり　朝二
箱庭と笑わば笑え僕の夢　よしを
頂上に恩を忘れた顔が佇つ　慶子
あの時の傷を話せる人といる　澄子
自信満々ポケツで鍵の音がする　林鶴
青い空二人で語る草枕　静海
到達の範囲で目標定められ　麗水
白萩の気品が庭をひきしめる　流風
ひと言が火種　男対男　里風
退き際を知ってる男のマイペース　秀子
芒穂の波打つ海は白に白　民恵

京都塔の会　松川　杜的報

美しい顔に似合わぬ啖可きり　永楽

病むベッド雪のニュースを聞いている季　貧
神のもの神にかえす火とんど焚き　笛珠
スト終る錆びたレールにある怒り　和友
新聞を一溜り見る夜帰り　紫香
土知らぬ地下足袋鉄骨を軽業師　王石
才女には遠く持論は曲げぬペン　明代
美しい言葉で僕をこき使い　客遊子
コマーシャル美人は短かく喋るだけ　白渓子
床運動はじけて流れて躍動美　求芽
もう終る頃の月賦へ痛み出し　飛鳥
おけら火を廻す子の手が冷えてくる　潮花
大股の父におけらの火とあえぎ　蘇堂
おけら火の流れをそれた灯が二つ　誠史
旅がらす傾くこころ抱いてゆく　水客
湯どうふの此処は尺八の音で暮れる　杜的
川柳ささやま　河原みのる報
落選の報一人いに二人去り　初音

佳句地10選（前月号から）

岸　南柳　選

巣を作る蟻は寄り道など知らず　道夫
色眼鏡かければ白いものが無い　一路
償いの重さに負けた酒の味　雀踊子
年寄りに迷子の札がいる団地　儀一
プラン又トイレへ行ってから変り　眉水
ライスカレー食べても最後に欲しいお茶　右近
おおらかな愛水臭いかも知れぬ　武雄
前向きに生きて厄日に気付かない　智子
便利には成ったが霊験遠くなり　好郎
ほんとうの勇気ほんとのこと話す　三辛堂

遠ざかる悲しい背にある演技　みのる
歳月が憎しみの念つれて去り　まどか
ジェット機の去るまでにらむ立話　与志
にげ去ったインコに寄せる今朝の雪　やす子
整理した筈の女が声をかけ　精一
身辺の整理に父の死をみつめ　とよ子
血圧が寒波の予報へ身構える　宗珠
寒波　整形の鼻にこたえて来　越山
摘心へ迷う女の花ばさみ　とんぼ
境界線屋根がかぶさるように越し　ひか平
宝くじ一つちがいで年を越し　可住
越す馬令薬麦で煩悩追っ払い　近江
物価高利子追い越され追い越され　緑村
一線を越えて落としたひと雫　れい子

川柳たけはら　森井　菁居報

信号がほしいダンプのつづく道　鬼焼
娘や孫のいる幸せの柿吊るす　松緑
人目には幸せそうでよしとする　静水
末っ子は恋の話もして十九　房子
善人の嘘振り向く人もなくかなし　不朽
句集うれしや僕が選した句があった　蘭幸
向寒の雨にダリヤの色が冴え　峰泉
雲ひとつない空心も澄んでいる　千代美
父ちゃんの真似して釘を打ちたがり　笑子
子守唄俺が歌えば寝てくれず　文晴
ヒクヒクヒク晩秋の朝蝶生まる　寛子
その愚痴も入れた女の小抽斗　紫光
思いを変えれば倖せの中にいる　貞子
輝きもさすが本場という真珠　そのみ
遠足の日はばつぐんに早く起き　愛
今日はゼロ日海にも満干ある救い　菁居

くす玉が他人の上でばかり割れ　英詩
今ものを言うなカープが優勝す　政己
まだ夢を追うて悟りのない孤独　かつ子
目の前に冬を迎えて芽が覗き　一路
じんみんは空くじばかり抜く仕組み　のばら

川柳東大阪　竹中　肖二報

ソロバンを持つとハイドの顔になる　静馬
方角がどうもおかしい顔になる　恒明
描き黒子まできっちりと双生児　古方
先妻がそしらぬ顔ですれ違い　多久志
泣き顔になって嬉しさかくされず　好郎
口髭を落して借りに来るお顔　喜風
小便小僧の影が伸びてる平和だな　酔々
伸び悩む散票はらはらするばかり　静歩
黒い手が伸びて汚職におどされ　好一
背伸びした期日の手形とは知らず　儀一
伸びる店ここの夫婦は仲が良い　文秋
銛の綱伸びて鯨を追うしぶき　雀踊子
予備テスト通っただけで有頂天　右近
有頂天小さな石につまずき　肖二
有頂天誰かれなしに話しかけ　水京
遠慮するマナーに氷菓とけている　柳宏子
如才なく養子家風にとけこんで　思月
友情にマネーの枠があるを知り　正彰
友情の借り着で下座の祝い膳　与呂志
楽焼へこの人ならぬ裸婦の線　鬼遊
親分が威張ると子分までいばり　綾女
子分の子分だから親分を刺せる　弘生
親分の知らぬ子分がたんと居る　三十四
月を見て吠えているのは子分だな　美幸
ささやかな生き甲斐朝の茶がうまい　誓二

和歌山七面句会　中筋　三幸報

罪ひとつおさめるつぼも選り好み　寿子
都合よい時だけ仲間の顔になり　富子
仲間だからはっきり主張する個性　武雄
長生きのバロメーターで歯は自前　勇次
贈られた壺に義理がつまってる　太茂津
白い歯に可愛い嘘がある月夜　其夕
歯には歯を妻も麻雀はじめたり　幸
屋台店仲間のような口を利き　晶子
マダムもう仲間の癖を知っている　光治
歯車の合わぬ夫婦の子沢山　淳子
大壺に唐人の舞生きている　凡夫
身に纏う物で判断壺を売り　多加子
口裏をあわせ仲間と出るトルコ　ふく子
そろそろと家宝の壺をあてにする　三幸

三井が丘川柳会　高田　博泉報

鶴を折るひとの顔みな美しい　博文
折鶴の晴着姿で初詣で　正子
折鶴を手書きの帯へふりかえる　亜也子
千羽鶴こころを込めて一つずつ　公子
病院で折鶴習う男の子　三郎
ほえかごへ頼んまっせと人の波　亜句童
意識の奥で目覚しが鳴っている　亜成
平和なり波間に遊ぶ白い鳥　博泉
国富みしか甍の波と穂の波と　二松
物忘れ我も初老の波にのる　琴音
三が日テトラポッドも波静か　てまり
笹の波せせら笑っている不況　度
拡がった波紋に驚いている小石　柳宏子
母にだけ切れる鋏の鈴が鳴る　〆女
ひとすじに真実一路の鈴鳴らす　亜鈍

波長が合うたんやなラジオが鳴り出した古方　三千子
白いもの白く洗って妻の意地　小路
波一つ立てず立たせず出来た嫁　薫風
沈むだけ沈めば静かな波の底　岸和田川柳会　植山

義捐金声する箱にそっと入れ　武助報
俄か雨水平線も真二つ　民治郎
乱舞する螢の光に夢がある　有雅
もう忘れましたとそっけない返事　千人
忘れてる頃に女と又出逢い　春栄
過疎守り自然を友として長寿　幸代
灰になるまで煩悩の火は消えず　露子
忘れ物届けてひよんな眼で見られ　香珠夫
新年の抱負今年も又同じ　葛城
特売場に来て見失う身躾み　武助
しみじみと老後新聞記事をよむ　白光子
雪だるま昇る朝日が持って行き　操子
洋凧に負けるものかと奴凧　裕子　南海電鉄川柳会（大阪市）辻　静芳

顧問料も出さずずらりと名を飾り　圭水報
会社より顧問弁護士身を守り　摩天郎
顧問弁護士おくほど会社のし上り　柳信
顧問料取れぬ赤字の社で食えず　宏子
停退へ落ちつくひまのない顧問　川狂子
公務員の定年顧問の席がない　維久子
飼い殺すつもり顧問の辞令くれ　正彰
名だけの顧問捨て扶持当てがわれ　十止庵
顧問料出して老後を見る律義　誓二
新入社顧問と知らずからかわれ　肖二
菊愛す余生の父は顧問なり　儀一
おかしな夫婦勘違いで仲直り　千万子
勘違い怒った方が笑い出す　鎮彦　川柳大阪　児島与呂志報

屈託の無い人生の高笑い　綾女
幸せは二人のものです腕をくみ　洛酔
方角を忘れたような声で唄　敏
鼻毛抜くクシャミ風邪をいたわられ　眉水
初便り大きくなった笑顔添え　笑風
徹夜で並ぶ時間で鈍行で帰省する　漁人
落伍した自分をせめている拍手　鶴丸
くちづけの天使のような顔になり　道子
スト済んで鎖たレールのきしむ音　喜酔
星月夜散歩の犬も遠まわり　季賛
パパとママ口づけしてと云う坊や　天草
幸せの中でゆっくり深呼吸　武松
司会者はくちづけ根掘り葉掘り聞き　甫久路
列島にまで過疎があり助言する　呑歩利
沈思黙考だんだん眠くなってくる　秀峰
捨て猫をふと思いやる雨の夜　重人
結論はほれて良かった酒の味　本蔭棒
あれこれと義理を残して年を越し　胡蝶
拍手を打って心を確める　雅巣　虹川柳倶楽部　新岡回天子報

雲海を出れば初日の日本なり　与呂志
デパートの地下で七草買って来る　照仲
家業継ぐ長男の意志屠蘇祝う　広坊
看護衣をぬげば天使も女なり　実
餅腹に七草粥も乙な味　勝一
名優の真髄みたり鏡獅子　一竿
太つ腹な妻を泣かしてみたくなり　畑中
風流をいばりで汚がす雪景色　愛郷
花嫁を貰う権利も俺のもの　朴竜
海峡をくぐり島にも灯が点り　三一
成人を位牌の母に話しかけ　岩光
お祭りのようにのぼりの年の暮れ　三男
山小屋に来て新米の味を知り　金志郎
泣き面に蜂郵政の年の暮　虹汀
名優と言う獅子舞の舞台なり　五木　駒つなぎ句会（大阪市）岸　回天子

雪肌にあやかりたいと頬をつけ　南柳報
粉雪は戎の笹ともつれ合う　茂子
倖せな毛皮は美女を抱きかかえ　善信
雪景色ふる里の家とおく見え　綾女
雪すべる孫のお守に困りはて　つとむ
雪の道心きよめること多き　昌女
毛皮被てホテル出る顔けものめき　宏子
手のとどく毛皮はエリを飾ってる　多津緒
立ち話の儲け聞いてる銀狐　鎮彦
ミンク買ってもらった人ともう別れ　摩天郎
採血車毛皮は見向きもしてくれず　恭太
育園

川柳塔柳箋

送料共三百円になりました

欲しいけど口には出せずいる毛皮　柳信
首に巻くミンクは温くいわての夢　祇風
ミンクまで着せて女にみくびられ　儀一
ウインドのミンク妻が動かない　恒明
毛皮ですと上衣の裏をちらつかせ　正彰
落選を知ってる応接間の毛皮　小路
不況なんて何処吹く風とミンクゆく　潔
やがて小女は毛皮の虜になるだろう　肖二
毛皮から人間の眼を覗かせる　小松園

生々楽天刊行記念句会

日時　三月八日（月）午後六時
会場　金属会館
　　南区鰻谷東之町10番地
　　電話 271・3935番

開会の辞と祝辞　西尾栞
あいさつ　中島生々庵
柳話　若本多久志

兼題
「絵」　小浜牧人選
「生」　橘高薫風選
「蹄」　菊沢小松園選
「天」　川村好郎選

席題　二題当日発表
　　各題三句以内厳守

会費　三百円

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

4月の兼題　「満開」「身綺麗」　「放談」「剛情」

3月句会は8日（月）

募集

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「善意」小砂白汀選
「鯉のぼり」羽原静歩選
「母」森田茗人選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「降参」江城修史選
「時間」都倉求芽選
「晴れ間」西垣錦風選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

3月は「生々楽天」刊行記念句会

定価　三百五十円（送料29円）
半年分　二千二百五十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十一年二月二十五日印刷
昭和五十一年三月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　東洋印刷製本㈱
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

「生々楽天」完成

★川柳塔の首脳部が総力を挙げて協力した主幹ご夫妻の句画集がいよいよ発刊された。正に待望の圧巻である—刊行記念パーティなども発表され、川柳塔のよろこびが、ここに一つ気に開花する。祝福申しあげる。

ハワイ吟行特集

★日米交歓川柳大会とメイ打ったハワイ6日間の夢の吟行—この破天荒の〝出来事〟は川柳塔社の大きな記録として永く伝え語られることであろう。余談だが、ぼくや葉子さんに多くの方々からお土産をいただいたが、荷物の多い異国の街で「コレを買って行ってやろう」というお心がとてもうれしかった。お礼申しあげます。（本号に特集記事の載せきれなかった分は次号に発表）

電話

★名刺などにまで「昼まで寝ています」と、自宅の電話番号の横に刷りこんである。月のうちの半分は午前8時ごろに就寝、早く床にはいる日でも午前4時である。だから朝の9時や10時に電話で起こされると何を聞いているのか分からないことがある。それとは別に電話はあまり好きでない。どうにもあの数字がニガ手である。僅か7回まわすのにさえ、番号を書いた紙きれ片手に回わさないと間違えるのに11回も12回もまわす地域にはホトホト参ってしまう。どうにも数字を覚えるのはニガ手中の苦が手である。したがってついペンを握ってしまう。しかしそのハガキが電話料金の倍以上になり、さすがの電話恐怖症もここいらで考え直さねばならない時が来たようである。

返信料

★こんなこと書きづらいが〝返信料〟なしの問い合わせが相当にある。そのほとんどがご自分のことで、たとえば某氏は今なにをしているとか、といったもの。なかにはハガキで返事の書けないものもある。封書が50円ともなれば社もつらいので、よろしくご協力願います。新聞でもうご承知の方もあるでしょうが、三月中旬に秋田実先生主宰の「漫才」復刊第一号が出る。当分は季刊だが、これまでもよく台本などを送ってきて批評をしてくれという。こんな場合、返信料のはいっている分だけにした。通信道徳も知らない人によい台本が書けるはずがないからだ。

川柳塔の歌

★そう簡単には集まらないとは予想していたが、それにしてもすこし少なすぎ、ぼくの友だちが出している二誌に、この募集が紹介されて一つは歌謡専門誌である。その専門家が二、三書いてくれたが、川柳の心は川柳家が一番よく知っているはずである。今からでもよい、もう一丁汗をかいていただきたい。

花信そろそろ

★旅先きからいただく名所絵ハガキは「旅」と書いた封筒に入れてある。ときどきそれらを机上にならべ、羨やましいナ、と思いながら拝見しているが、今年もまたどこへも行けそうにない。今年は自分の句集のためで、今までは人様のお手伝いばかりしてきたが、サテ自分のものとなると、つい冒険がしたくなり、四度刷りの表紙カバーから扉までオフセット印刷を試みてみた。今後の句集を出す人の参考になればよいと思っている。表紙カバーは寄席の定式幕の色で気分を出してみた。（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼シャンシャン、シャンシャン鈴の音が吹雪の中近づき、いちどに寒さが吹飛んでしまいます。

▼シャンシャン馬橇なのです。乗っても橇なので馬が走りますと振り落とされます。スリル満点、子供心に背中を合わせて乗っていたように思います。

お役だてください
アリナミンA®
タケダ
効能＝肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB_1補給。脚気。神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆食後すぐおのみください。☆25ミリ錠。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年二月二十五日 印刷
昭和五十一年三月一日 発行（毎月一日発行）
創刊 大正十三年 通巻 五八六号
川柳塔 三月号
定価 三百五十円（送料二十九円）

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2

551

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

南海電鉄